

男鹿市複合交流施設整備 基本構想

令和8年3月

男鹿市

目次

第1章 基本構想の位置づけと目的

- 1-1 本構想策定の背景
- 1-2 複合交流施設整備の目的
- 1-3 本構想の位置づけ

第2章 現状と課題分析

- 2-1 男鹿市の人口・子育て・交流環境の現状
- 2-2 既存図書館の現状と課題
- 2-3 子育て支援センターの現状と課題
- 2-4 市内外の交流・観光の現状
- 2-5 課題のまとめ

第3章 市民・利用者の声（アンケート／ワークショップ）

- 3-1 アンケートの実施結果
- 3-2 ワークショップから得られた示唆
- 3-3 市民ニーズの総括

第4章 複合交流施設のコンセプトと基本方針

- 4-1 先行事例から得られた知見
- 4-2 基本コンセプト
- 4-3 基本整備方針
- 4-4 中核機能の位置づけ
- 4-5 付帯機能の考え方

第5章 候補地比較と立地方針

- 5-1 候補地の比較
- 5-2 立地方針

第6章 施設規模・概算事業費の考え方

- 6-1 規模・施設構成の考え方
- 6-2 事業費の考え方

第7章 事業手法・運営方式

- 7-1 想定しうる事業手法
- 7-2 持続可能な運営のための課題

第8章 今後の進め方（ロードマップ）

- 8-1 想定される全体スケジュール
- 8-2 次フェーズへの引き継ぎ論点まとめ

補足資料

- ① 市民アンケート調査票
- ② 市民ワークショップ ワークシート

第1章 基本構想の位置づけと目的

1-1 本構想策定の背景

男鹿市では、人口減少・少子化・高齢化が同時に進行し、市民の学び・交流の機会、子育て支援、地域活力の向上といった複合的な課題が顕在化しています。これらの課題に対応するために、男鹿市では複合交流施設の整備を進めることとし、基本構想を策定することとなりました。複合交流施設の整備にあたっては、以下の3つが特に重要な背景です。

(1) 市民の学び・交流の拠点の強化が必要

既存の図書館や公民館は老朽化が進み、機能や空間の制約が大きい。世代を超えて自然に集い、学び、交流できる環境が不足しています。

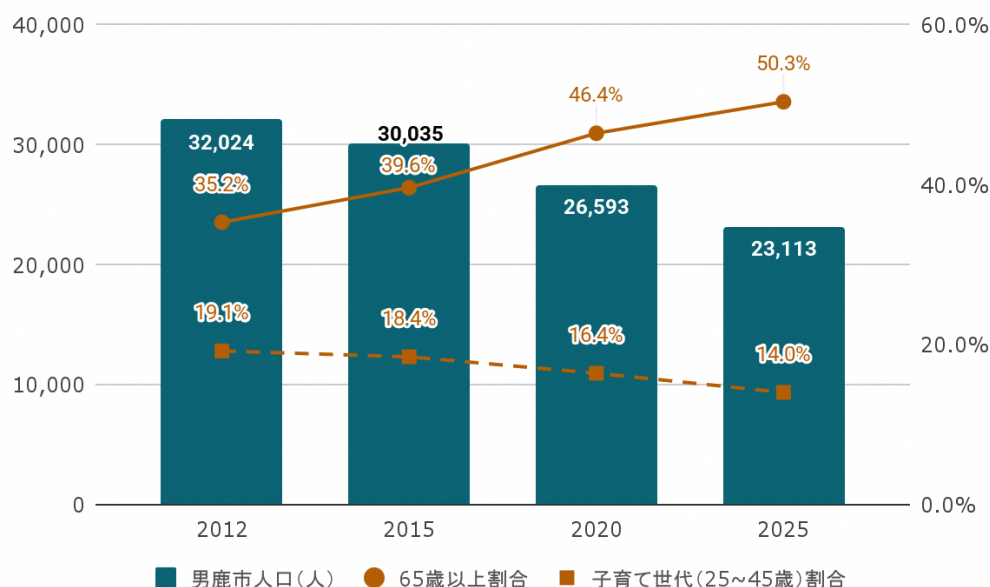
(2) 子どもや子育て世代が安心して過ごせる場の不足

男鹿市では子育て支援制度や相談体制の充実が進められている一方で、雨天時でも遊べる場や、子どもだけで利用できる居場所、保護者同士のつながりが生まれやすい場の充実が引き続き求められています。

(3) 市外・県外からの来訪者が自然に立ち寄れる場の必要性

男鹿市には観光資源が多いものの、日常の暮らしの魅力を伝えられる環境が十分ではありません。滞在者が気軽に休憩したり、情報を得たり、地域文化に触れられる機能を持つ拠点は、市内の活力向上にも寄与します。

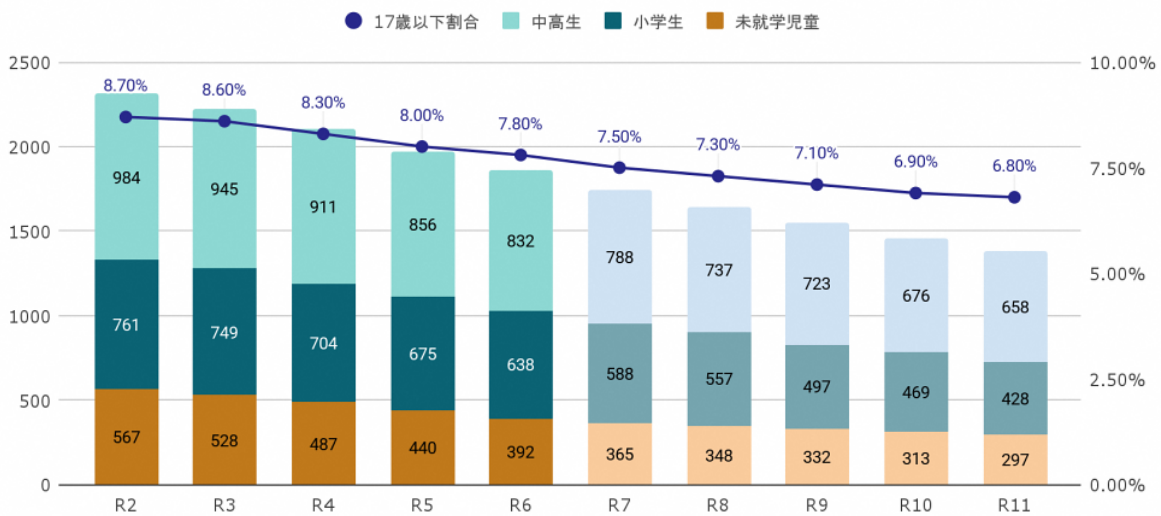
<男鹿市人口推移・65歳以上 / 子育て世代割合>



男鹿市webページ統計データより作成

<https://www.city.oga.akita.jp/soshik/seikatsukankyoka/ogashinitsuite/1302.html>

<男鹿市17歳以下人口推移>



※令和7年以降は推計値
第3期男鹿市 子ども・子育て支援事業計画より作成

1-2 複合交流施設整備の目的

複合交流施設は、現状の課題を解決し、男鹿市の未来を支える基盤として次の目的を持つことが望ましいと考えられます。

- 日常的な学び・子育て・交流を支える中核拠点となる
⇒図書館・子育て支援・屋内遊び場などの機能が連携し、市民が日常的に訪れやすい中心拠点を形成すること。
- 市民が主体的に関わる活動の場となる
⇒市民活動や交流イベント、学習機会などが自然に生まれる環境を整え、地域の自主的な活動を育てていく場の力を持たせること。
- 市外・県外からの来訪者も利用しやすい公共拠点となる
⇒観光客や移住検討者が気軽に利用できることで、地域への理解促進・関係人口の拡大・滞在時間延伸に寄与すること。

本施設は、地域における「学び・子育て・交流」の拠点となるものです。男鹿市の掲げる「子育て環境日本一」というビジョンと、住民のニーズの双方にこたえる存在となり、世代を超えた交流や支え合いを促進するハブとしての役割を果たすことが望まれます。

加えて、子育て世帯に優しいまちづくりは、定住促進や若年世帯の流入といった人口動態への好影響も期待できます。

男鹿市が掲げる「市民みんなで子育てする環境づくり」という方針に整合し、複合交流施設はその具現化として位置づけられます。行政のみならず、市民や地域団体、子育て当事者が参画し合意形成を進めることで、「オール男鹿」による共創が可能となります。そうすることで、施設は単なるハコモノではなく、地域の未来を共に育むための象徴的拠点になると見込まれます。

1-3 本構想の位置づけ

複合交流施設の整備は、建物の計画から建設、開業まで数年にわたる長いプロセスとなります。この中で、本構想は最初の重要なステップにあたります。

基本構想が担う役割は以下の通りです。

- 男鹿市の現状や課題の整理
- 市民・関係者のみなさんの声やニーズの把握
- 新しい施設に求められる機能や考え方の整理
- 候補地の比較や方向性の検討
- 事業の進め方や運営方式の初期判断
- 今後、詳細な計画に進むための前提条件づくり

この段階では建物の具体的な設計までは行いません。本構想は、「これからどの方向に進むか」を決めるフェーズです。また、この後に続いていくステップと、各目的は以下となる予定です。

1. **基本構想（今回）**：課題やニーズの整理、整備方針の方向性を決めます。
2. **基本計画**：面積、動線、機能配置、候補地選定、整備費の検討などを行います。
3. **基本設計**：基本計画で決めた内容をもとに、建物の形や各部屋の配置、必要な設備など、施設の設計の骨格をつくります。
4. **実施設計**：建物の具体的な設計図をつくります。
5. **工事・開業準備**：建設・開業に向けた準備を行います。
6. **開業・運営**



第2章 現状と課題分析

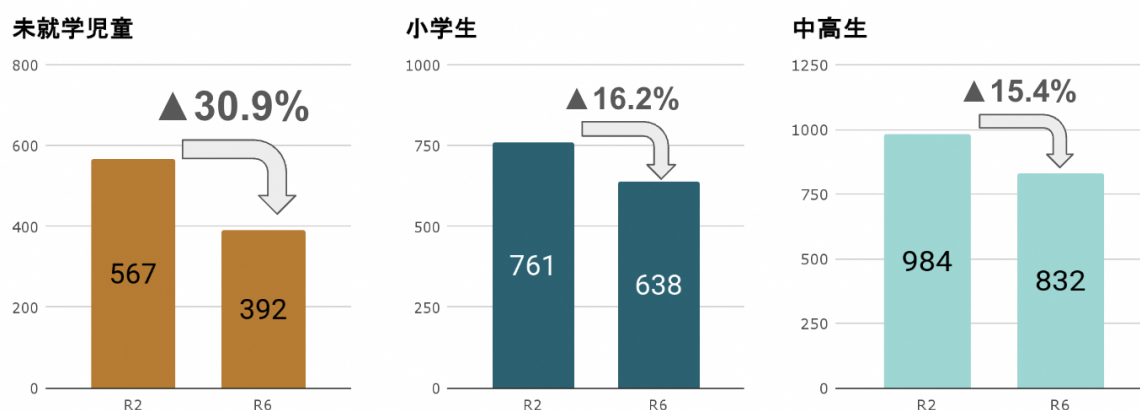
2-1 男鹿市の人口・子育て・交流環境の現状

男鹿市では、人口減少や少子化、高齢化が同時に進んでおり、地域の学びや子育て、交流のあり方にも影響が広がっています。市の人口は昭和30年（1955年）ごろの約6万人をピークに減少を続け、令和5年（2023年）には約2万4千人となりました。

特に未就学児・小学生・中高生の3区分で令和2年と令和6年を比較すると、未就学児が約3割と最も大きく減少しており、将来的な少子化の一層の進行が懸念されることから、将来の地域の担い手を育む環境づくりがこれまで以上に重要になっています。

そのため、子育て世代が安心して暮らせる日常環境を整えるとともに、将来の選択肢として男鹿を選んでもらえるような魅力を高めることが、市内外の誰にとっても豊かな地域づくりにつながると考えられます。

<年齢帯別、人口減少率の比較（R2→R6）>



出展：男鹿市公開情報（市のWEBページ）より

男鹿市は「子育て環境日本一」を掲げ、保育料や給食費の無償化、保育施設でのおむつ無償提供など、制度面の支援は全国的にも先進的です。しかし、市民の声や施設職員のヒアリングからは、制度だけでは補いきれない「日常の居場所」の不足が指摘されています。特に、子どもだけで遊べる場所や、雨の日に子どもが遊べる屋内空間が限られていること、親同士が気軽につながれる場所が少ないこと、ベビーカーや車で訪れやすい動線が十分ではないことなど、子育て世代にとって身近な課題が多く挙げられています。

また、男鹿市は豊かな自然、伝統文化、観光資源に恵まれ、年間を通じて多くの来訪者が訪れています。しかし、観光客や移住検討者が市民の日常に自然に触れられる場所は多くなく、まちなかで気軽に過ごしたり、交流する機会が限られています。市民からも「大人と子どもと一緒に過ごせる場所が少ない」「まちなかのにぎわいが限定的」といった声が寄せられています。

一方で、男鹿市内には、男鹿駅前や船川地区のように公共施設や商店、観光資源が集積するエリアや、船越地区のように居住地や子育て関連施設、商業施設が近接する生活拠点となっているエリアが存在しています。

こうした特性の異なるエリアにおいて新たな拠点を整備することで、市民の日常利用と来訪者の立ち寄りが重なり合い、まちなかの回遊や滞在の広がりが生まれる可能性があります。

学び・子育て・交流を支える新しい施設が整えば、市民にとって日常的に使いやすい場になると同時に、市外・県外から訪れる人々にとっても男鹿の魅力に触れる入口となり、地域全体の活気につながっていくことが期待されます。

こうした状況を踏まえると、男鹿市には「学び」「子育て」「交流」を支える複合的な拠点が求められており、市民の暮らしを支えるとともに、外から訪れる人ともつながりを生み出す場の必要性が高まっています。本構想では、こうした現状と課題を踏まえ、男鹿市らしい新しい複合交流施設のあり方を検討していきます。

2-2 既存図書館の現状と課題

図書館沿革

男鹿市立図書館は、昭和52年（1977年）に開館し、市民の学びや文化活動を支える拠点として長年親しまれてきました。開館以来、地域の読書活動の推進、郷土資料の収集・保存、子どもへの読書振興、読み聞かせをはじめとした市民ボランティアとの協働など、地域に根ざした取り組みを重ねてきました。

平成の後期からは、館内イベントや読み聞かせ会の充実、視聴覚資料の整備、情報検索端末の導入など、時代の変化に合わせた改善も行われてきましたが、昭和期に建てられた建物は老朽化が進み、施設面では現代の利用ニーズへの対応が難しくなっています。

また、図書館は建物の2階に設置されており、エレベーターがないことによるバリアフリーの課題や、動線の不便さなどが顕在化し、特に子育て世代や高齢者にとって利用しづらい状況が生まれています。

こうした歴史を経て、男鹿市立図書館は約半世紀にわたり市民の暮らしに寄り添ってきた一方で、次の時代にふさわしい図書館のあり方が問われる段階にあります。新たな複合交流施設の整備を検討する今、図書館として培ってきた価値を継承しつつ、現代の多様なニーズに応える新しい姿を描くことが求められています。

(1) 概要

設置年月日	昭和 52 年 5 月 26 日 開館 築 48 年 (S52.3.31 竣工)
所在地	男鹿市船川港船川字外ヶ沢 126 番地 1 (同施設に船川港公民館) 男鹿駅 徒歩9分
開館時間	平日 9 時から 18 時 / 土日祝日 9 時から 17 時
休館日	月曜日 (祝日の場合は、その次の平日) 12 月 29 日から 1 月 3 日
延床面積	440 m ²
駐車台数	40 台 隣接 5 台 ハートピア共同駐車場 35 台

(2) サービス

貸出数	10冊以内 ゴールデンウィーク、年末年始 15冊まで
貸出期間	14日
登録資格	市内に在住・通勤・通学している方
予約	来館・ホームページより予約可。10冊まで。
リクエスト 購入希望	実施
インターネット利用	PC1台設置 談話スペース内のみ freeWi-Fi 可能
団体貸出	30冊 1カ月
学校図書館貸出	90冊 2カ月
公民館図書館貸出	50冊 2カ月

(3) 蔵書 (令和7年4月1日)

開架冊数	一般	39,343冊
	児童	13,369冊
閉架冊数		27,216冊
蔵書数	一般	62,667冊
	児童	17,241冊
	総数	79,908冊

(4) 利用状況 (令和6年度)

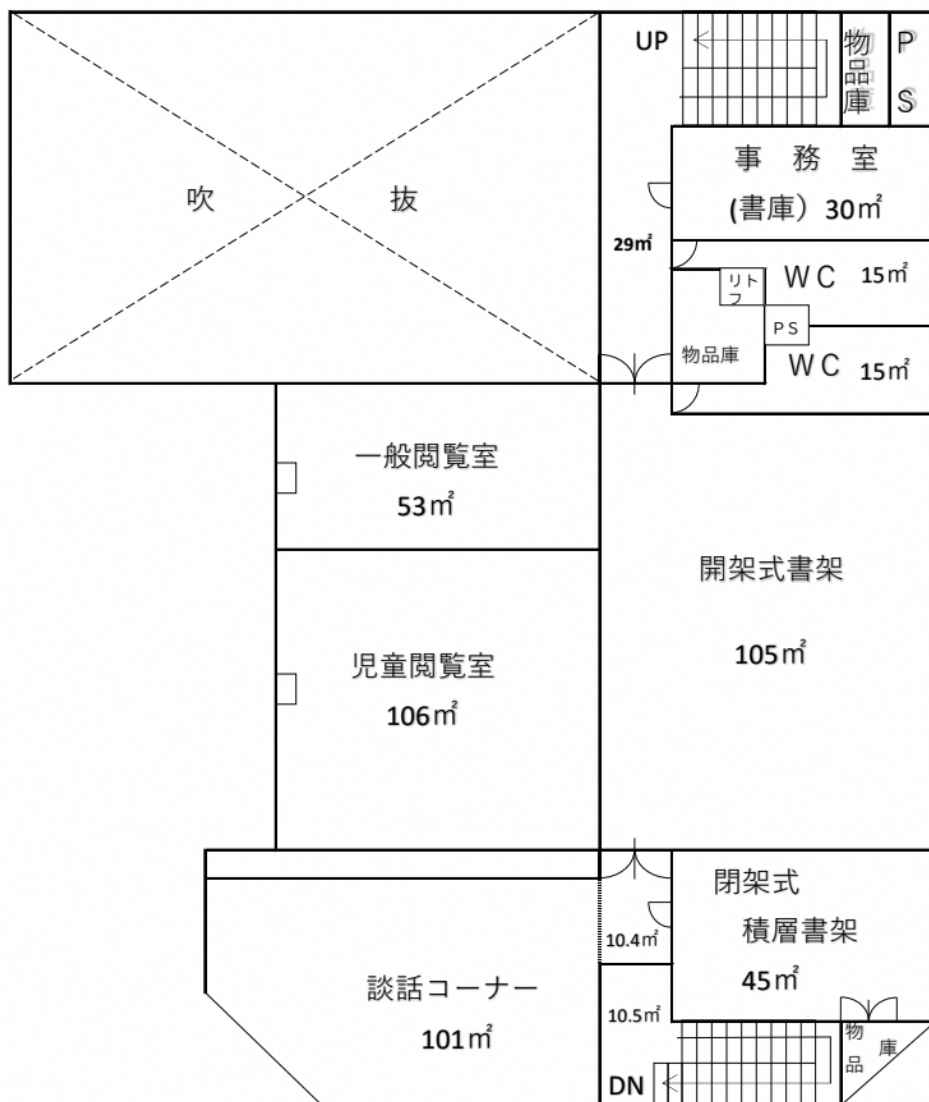
図書利用カード登録者数	一般	5,160人
	児童	183人
	総数	5,343人
来館者数	一般	13,479人
	児童	1,364人
	総数	14,843人
貸出冊数	一般	29,901冊
	児童	10,110冊
	総数	40,011冊

(5) 人口1人当たりの状況 (人口: 23,164人 令和7年3月31日)

人口あたりの率	図書カード登録率	23%
人口1人あたりの状況	来館者数	0.6人
	蔵書数	3.4冊
	貸出冊数	1.73冊
	図書費	129.4円

(6) 館内図

2 F



▼ 書架



▼ 児童書スペース



▼ 図書館へは、階段でのアクセスが必要



▼ 着座スペース



課題分析

①資料面での課題

男鹿市立図書館の蔵書は、市民ニーズに応えながら長年扱われてきた一方で、スペース不足のため閉架書庫の使い勝手に課題があります。特に、郷土資料の収蔵スペースが限られており、市民が自由に手に取って閲覧する環境を十分に提供できていません。

また、電子書籍対応や、学校図書との相互検索システムなど、情報アクセスの面で改善の余地があります。

②施設面での課題

施設そのものの老朽化に加えて、次のような課題が指摘されています。

- 空間が狭く、多様な利用に応えにくい
 - 落ち着いて読書できる閲覧スペース、学習スペースが不足。
 - 児童コーナーが手狭で、親子で過ごす場所と静かに過ごしたい利用者の動線が混在。
 - イベント開催時は館内が混雑し、駐車場も不足。
- バリアフリー環境の不足
 - エレベーターがないため2階にアクセスできない利用者がある。
 - 通路幅が狭く、車椅子・ベビーカーの移動が困難。
 - 授乳室や子ども用トイレ、ユニバーサル対応トイレなどが不足。
- 事務効率と運営環境の課題
 - 職員作業スペースが狭く、バックヤード機能が不足。
 - 限られた職員体制の中で、新サービス導入やイベント企画が難しい。
 - 一部、雨漏りが発生しており、本という特性上、特に気を遣う必要がある。

これらは単なる改修では解決が難しく、新たな施設整備による根本的な改善が必要な領域といえます。

③サービス面での課題

サービス面では、電子貸出予約システムなどのICTサービスが不足している点や、中高生の学習時間などの利用者ニーズと図書館の営業時間の乖離などが指摘点として挙げられています。

一方で、ボランティアによる読み聞かせや展示づくり、市民参加の活動など、地域に根ざした文化的な取り組みは継続しており、新たな施設ではこうした取り組みをさらに発展させる可能性があります。

老朽化した現行施設では、多世代が安心して過ごせる環境づくりや、ICTを活用したサービス拡充、郷土資料の公開性向上、子育て世代への配慮など、現代の公共図書館が担うべき役割を十分に果たすことが難しくなっています。これらの課題を踏まえ、新たな複合交流施設の整備に向けて、図書館機能の再定義と環境改善が求められています。

2-3 子育て支援センターの現状と課題

子育て支援センター沿革

男鹿市地域子育て支援センターは、「地域子育て支援拠点事業」として設置されたもので、主に概ね3歳未満の児童とその保護者を対象に、子育て親子の交流の場や相談支援、地域情報の提供、講習会の開催などを行っています。

事業開始当初は、船越保育園（H16）、脇本保育園（H18）、船川保育園（H22）各施設の建設時に地域子育て支援センターを併設していましたが、拠点施設に職員を配置することで、保護者との相談環境の向上と、事業・事務の効率化を図るため、H26年度に船川北公民館内に集約しました。その後、施設の老朽化やスペースの制約を背景に、令和7年6月に現在の所在地（旧船越保育園）へ移転しました。

現在の建物は平成16年（2004年）に建設され、令和6年度まで保育園（定員205名）として利用されていたものを転用しており、広い延床面積（1106.96㎡）を生かし、支援センターとしては5室+ホールを使用しています。

移転後は、利用環境の向上に伴い、市外（潟上市・秋田市など）からの利用者も増加するなど、地域を越えた交流の場としての役割も高まりつつあります。

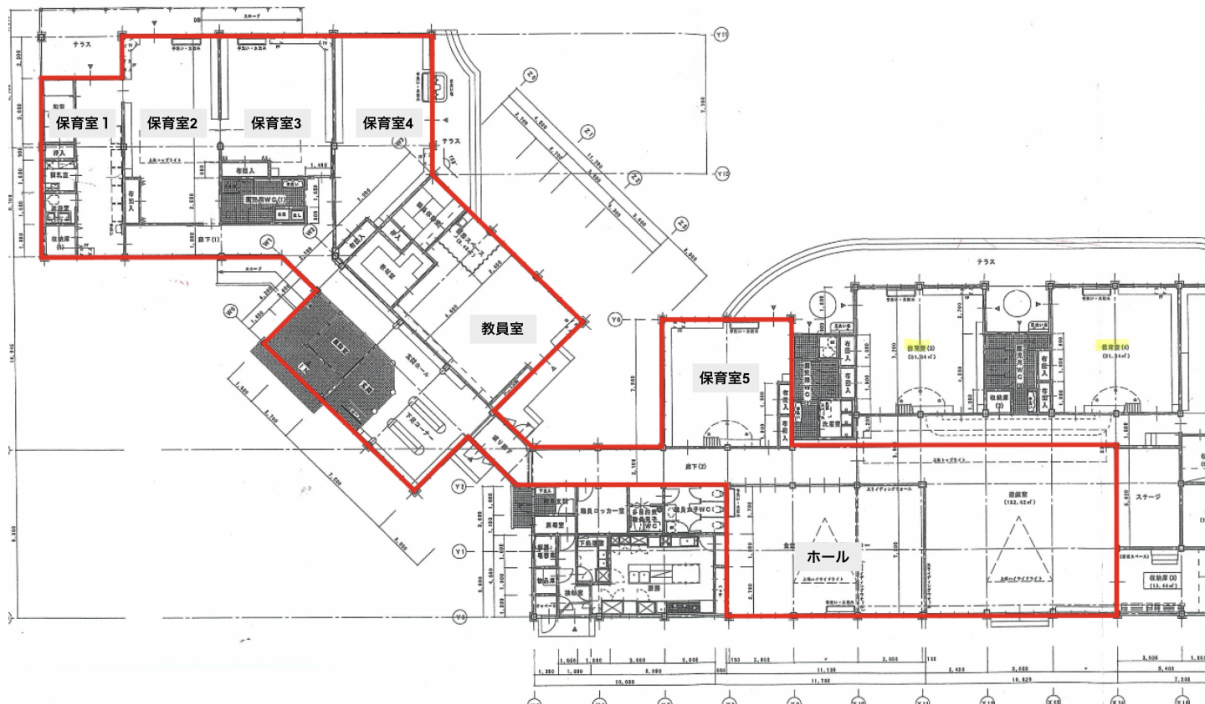
（1）概要

所在地	男鹿市船越字本町 9-1 船越駅 徒歩3分
築年数	築 21 年（平成 16 年 4 月～）
延床面積	1106.96 ㎡
収容人数	令和 6 年度までは定員 205 名の保育園として利用。 ※現在は、3 室を児童クラブとして利用中であり、支援センターとしては 5 室 +ホールを利用している。
開館日数	12 月 29 日～1 月 3 日を除く 359 日
開館時間	9 時～16 時
利用料	無料
管理主体	男鹿市 市民福祉部 子育て健康課

(2) 利用状況

年間利用者数	令和6年度： ・こども：917人 / おとな：958人 令和7年6月に移転：6月～8月の月平均利用者は286人
登録者数	登録不要
年齢層・利用目的の分布	年齢層：未就学児童とその保護者、兄弟 利用目的：こどもの遊び場
時間帯・曜日別の利用傾向	平日は未就園児童とその保護者が主な利用者。 土日祝は未就学児とその兄弟（小学生）も利用。

(3) 館内図



(4) 現況写真



▲保育室



▲屋外スペース



▲ホール



▲屋内遊具スペース

課題分析

①施設面の課題

現在の子育て支援センターは、旧船越保育園の建物を活用しており、複数の部屋を用途に応じて使い分けられる点や、体を動かせる部屋・休憩室・おもちゃの部屋など、多様な活動ができる環境が整っています。利用者からも「広くなって良かった」という声が多く、移転によって利便性が向上した側面が大きく見られます。

一方で、保育園用途を引き継いだ建物であるため、設備の老朽化や構造上の制約が残っています。雨漏りが発生する箇所があること、ホールにエアコンがなく真夏の利用を控えざるを得なかったことなど、日常運営に影響する点が挙げられています。

また、駐車場の台数が限られているため、人気の高い「わくわく広場」開催日などには混み合うことがあり、とくに雨天時に利用者が集中する際には利便性に課題が生じています。

②サービス・運営面の課題

利用者からの不満はほとんどなく、「広くなって良かった」「イベントが楽しみ」という声が多く寄せられています。移転に伴い、授乳室の設置や部屋の使い分けなど利用者の意見も反映され、現在のサービスには高い満足度が見られます。

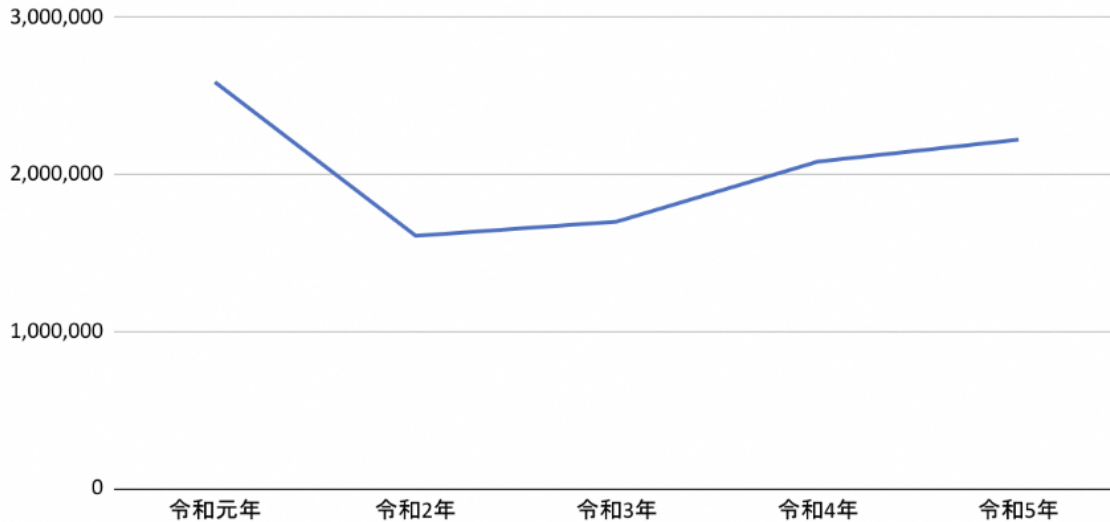
また、利用者のニーズは多様化しており、転勤などで男鹿市に移り住んだ家庭が地域に馴染む機会を求めて来所するケースや、市外（潟上市・秋田市など）からの利用者が増加するケースも見られます。これにより、従来よりも広い地域の子育てニーズに対応する必要性が生まれています。

現状、子育て支援センターは、利用者満足度が高く、乳幼児期の親子が安心して過ごせる大切な拠点として機能しています。一方で、建物の老朽化や駐車場の制約など、将来を見据えて改善すべき点も明らかになっています。新たに検討する複合交流施設では、現在のセンターが育んできた良さを引き継ぎながら、より多くの親子が安心して利用できる環境づくりを進めていくことが求められます。

2-4 市内外の交流・観光の現状

男鹿市は、国内外に知られる豊かな自然資源や伝統文化を有しており、観光が市の重要な基幹産業となっています。観光入込客数は、令和元年には年間約260万人に達しましたが、令和2年には新型コロナウイルス感染症の影響により大きく減少し、その後徐々に回復傾向にあります。観光客の多くは日帰り利用であり、宿泊を伴う滞在型観光の割合は依然として高くはありません。こうした構造は、市内での回遊性や滞在時間の伸び悩みに影響しています。

<観光入込客数（宿泊・日帰り別）推移>

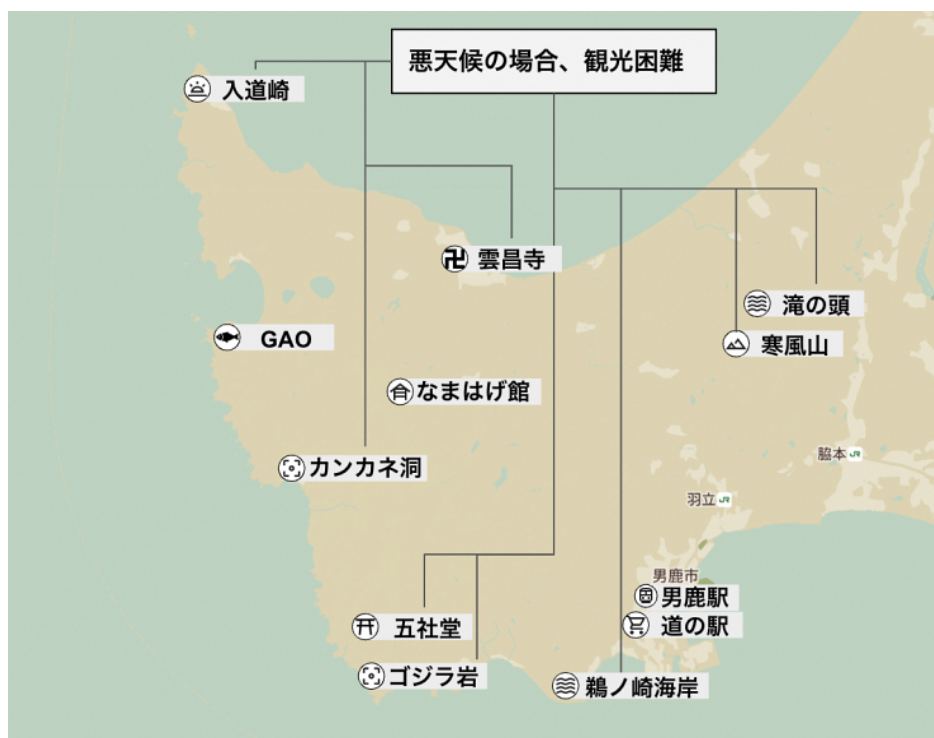


	観光入込客数	日帰り	宿泊	宿泊割合
令和元年	2,589,336 人	2,472,317 人	117,019 人	4.52%
令和2年	1,610,206 人	1,527,001 人	83,205 人	5.17%
令和3年	1,700,623 人	1,628,738 人	71,885 人	4.23%
令和4年	2,082,552 人	1,994,987 人	87,565 人	4.20%
令和5年	2,222,565 人	2,138,144 人	84,421 人	3.80%

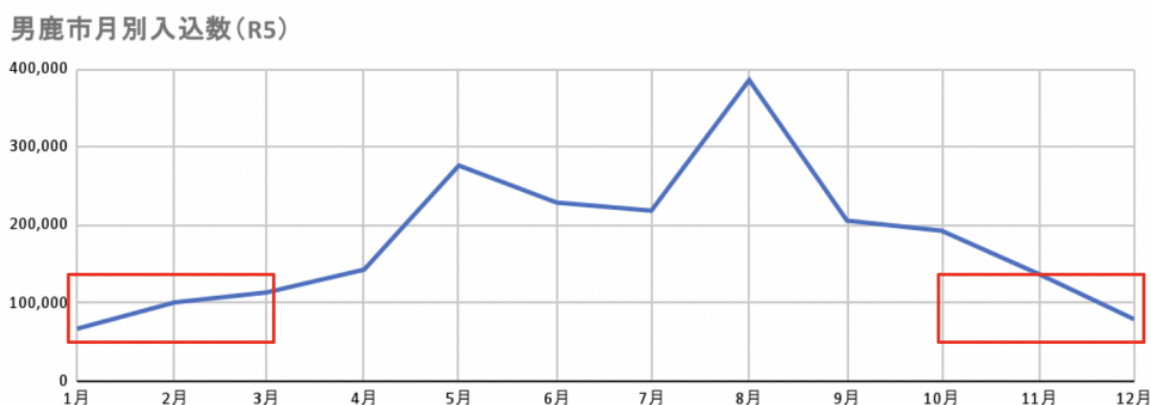
男鹿市の観光は、寒風山・真山神社・入道崎・なまはげ館といった観光スポットが市内広域に点在していることも特徴です。これらは自然や伝統文化の魅力を体験できる一方、季節や天候に左右されやすく、特に冬季には観光客数が大きく減少する傾向があります。こうした時期にも安心して過ごせる屋内環境の整備は、市民の暮らしだけでなく、市外からの来訪者が男鹿に滞在し続ける理由となり、市内消費や回遊の創出につながると考えられます。

また、観光の入口となる男鹿駅周辺においては、（天候に左右されずに）滞在しながら過ごせる場が限られていることもあり、市外・県外からの来訪者が立ち寄れる交流拠点が十分に整っていません。

<男鹿半島 主要観光地の位置関係>



<令和5年 男鹿市月別観光入込客数>



⇒冬季における入込数下落が顕著

一方、子育て支援センターのヒアリングによれば、市外（秋田市・潟上市など）から乳幼児連れの来訪が増加しており、「子どもと安心して過ごせる場所」へのニーズが地域を越えて存在しています。このことから、観光と市民サービスの境界を越えた利用が既に生まれており、子育て世代を含む市外利用者が男鹿市の日常的な拠点を求めていることがうかがえます。

このように、男鹿市の交流・観光には「豊かな資源がある一方、滞在の場が不足している」「冬季・雨天時に交流が停滞する」「市外の親子が利用できる屋内環境に限られる」といった課題が見られます。新たな複合交流施設には、市民の日常利用に加えて、市外・県外からの来訪者も自然に立ち寄り、地域と交わる「交流の基点」として機能することが期待されます。

2-5 課題のまとめ

これまでの人口動向、市内の子育て環境、図書館や子育て支援センターの現状、市内外の交流・観光の状況を踏まえると、複合交流施設の整備に向けて、今後より良い環境づくりを進めていくための視点として、以下のようなポイントが挙げられます。

① 子どもや子育て世代がより安心して利用できる環境づくりの検討

子育て支援センターは、多くの親子に利用され、一定の機能を果たしています。一方で、

- 幼児や小学校低学年だけに限らない多様な年齢層への対応
- 遊びの幅
- 気軽に立ち寄れる立地性

など、今後の利用者イメージを見据えると、より幅広いニーズに応えていく余地があると考えられます。

② 図書館機能の進化と、多世代が心地よく学べる空間づくり

男鹿市立図書館は長年市民の学びを支えてきました。一方、建物の老朽化やICT環境の更新、学びのスタイルの多様化など、時代に合わせて図書館の役割を広げていく必要性も見えてきています。

こどもが声を出しながら遊べたり、読み聞かせが出来るスペース、小グループで活動できるエリアなど、多様な学び方に応える空間への期待も寄せられました。

③ 市民と来訪者が自然に交わる場の創出

男鹿市には年間を通じて多くの来訪者が訪れていますが、日常生活の場と観光の場が交わる機会はまだ限られています。複合交流施設が、子育て世代の「日常の拠点」、観光客の「立ち寄り先」として機能することで、人と人、人と地域がつながる新たな交流の可能性が開かれます。

以上のように、子育て世代が安心して利用できる環境づくり、図書館機能の進化、多様な人々が自然に交わる場の創出といった視点は、今後の複合交流施設の在り方を検討するうえで重要な方向性になると考えられます。

第3章 市民・利用者の声（アンケート/ワークショップ）

3-1 アンケートの実施結果

■実施概要

本基本構想の検討にあたり、男鹿市における複合交流施設のあり方を市民の視点から把握することを目的として、市民アンケートを実施しました。

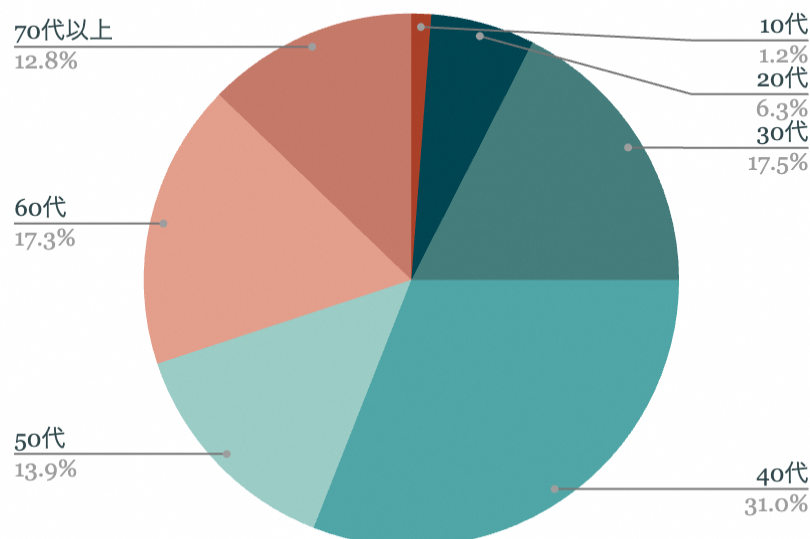
本アンケートでは、既存の図書館や子育て支援センターの利用状況・評価に加え、新たに整備する複合交流施設に対して、どのような機能や使い方が期待されているのかを幅広く把握することを主眼としています。

- | | |
|-----------|--|
| ・実施期間： | 令和7年（2025年）12月12日～12月28日 |
| ・配布方法： | 市内の保育園・幼稚園・小学校・中学校を通じた保護者への周知
男鹿市内在住者から無作為に抽出した1,000人への郵送配布 |
| ・回答方法： | オンライン回答 または 郵送回答 |
| ・回答数： | 588件 |
| ・回答者の主な属性 | 10代から70代以上まで、幅広い年代から回答
未就学児または小中高生を子育て中の世帯を含む
市内各地区からバランスよく回答を回収 |

本アンケートにより、特定の世代や地域に偏らない、多様な市民の声を収集することができました。

本節では、これらの結果をもとに、既存施設の利用実態や評価、新たな複合交流施設に対する期待について、数値データを中心に整理していきます。また、自由記述で寄せられた意見についても、定量結果とあわせて分析し、市民の実感や思いがどこにあるのかを読み解きます。

▼回答者年代構成



▼ 子育て中世帯の件数

	有り	無し	合計
未就学児の有無	135	453	588
小中高生の有無	215	373	588

▼回答者の居住地域

居住エリア	件数
船越	195
船川	137
脇本	90
若美	78
北浦	32
五里合	28
男鹿中	13
椿	10
戸賀	5
合計	588

■定量結果から見える市民意識の全体像と主要テーマ別分析

アンケート結果を全体として俯瞰すると、男鹿市民の間で複合交流施設に対して期待されている内容は一様ではなく、年代やライフステージによって関心の置きどころが異なっていることが読み取れました。一方で、それらの期待は互いに対立するものではなく、重なり合っている点も特徴です。

① 年代別に見る期待機能の違いと重なり

複合交流施設で「どのように過ごしたいか」という希望用途について、各年代ごとの回答割合（構成比）で整理すると、年代ごとの関心の置きどころの違いと、世代を超えて共通する期待の両方が見て取れます。

学生世代（10代）では、

- ・「読書・学習」
- ・「ワークスペースとして使う」

といった、学業に対しての利用希望が強く存在しています。

子育て世代（30～40代）における構成比の特徴は、

- ・「子どもと遊ぶ（屋内遊び場の利用）」
- ・「カフェでくつろぐ」
- ・「親子で参加できるプログラム」

といった項目の選択割合が高く、子どもを中心にしながらも、大人自身が滞在できる過ごし方が重視されていることが分かります。

中高年層（50代以上）では、

- ・「読書・学習」
- ・「カフェでくつろぐ」
- ・「イベントや講座に参加する」

といった項目が、各年代内で比較的高い割合を占めています。

これは、静かに過ごすことや、学び・趣味を日常の中で楽しむ場として複合交流施設を捉えている人が多いことを示しています。一方で、「交流スペースで人と会う」などの項目も一定の割合を占めており、単に個人で完結する利用だけでなく、無理のないかたちで人と関わる場としての役割も期待されていることが分かります。

構成比で整理すると、ほとんどの年代に共通して一定以上の割合を占めているのが、

- ・「読書・学習」
- ・「カフェでくつろぐ」
- ・「イベントや講座に参加する」

といった項目です。

これらは、子育て世代にとっては「子どもと一緒に立ち寄れる」「気分転換できる」場、中高年層にとっては「日常的に安心して過ごせる」場として、世代ごとに意味合いは異なりながらも、同じ空間を共有できる要素であることが分かります。

このことから、市民の期待は年代ごとに完全に分かれた機能を求めているのではなく、年代によって使い方が変わる、重なり合う空間構成に向いていると捉えることができます。

▼新しい複合交流施設への希望用途

割合	読書・学習	子どもと遊ぶ (屋内遊び場の利用)	カフェでくつろぐ	イベントや講座に 参加する	交流スペースで 人と会う	ワークスペース として使う	子育て相談や 情報交換をする	一時預かり・ 親子休憩・ 授乳スペース	親子で参加できる プログラム(読み聞かせ・ 工作教室など)	回答数
10代	40%	10%	20%	10%	0%	20%	0%	0%	0%	10
20代	13%	25%	23%	8%	3%	3%	6%	13%	5%	95
30代	14%	24%	19%	12%	8%	3%	4%	5%	11%	335
40代	18%	21%	22%	11%	7%	6%	3%	2%	9%	456
50代	24%	8%	26%	18%	13%	7%	1%	0%	3%	191
60代	20%	4%	29%	17%	20%	5%	2%	1%	3%	194
70代以上	21%	4%	29%	21%	20%	2%	0%	2%	1%	136

② 図書館機能に対する利用実態と期待

既存の図書館については、利用経験が限られている一方で、新しい複合交流施設において「読書・学習」を目的とした利用を希望する回答は比較的多く見られました。

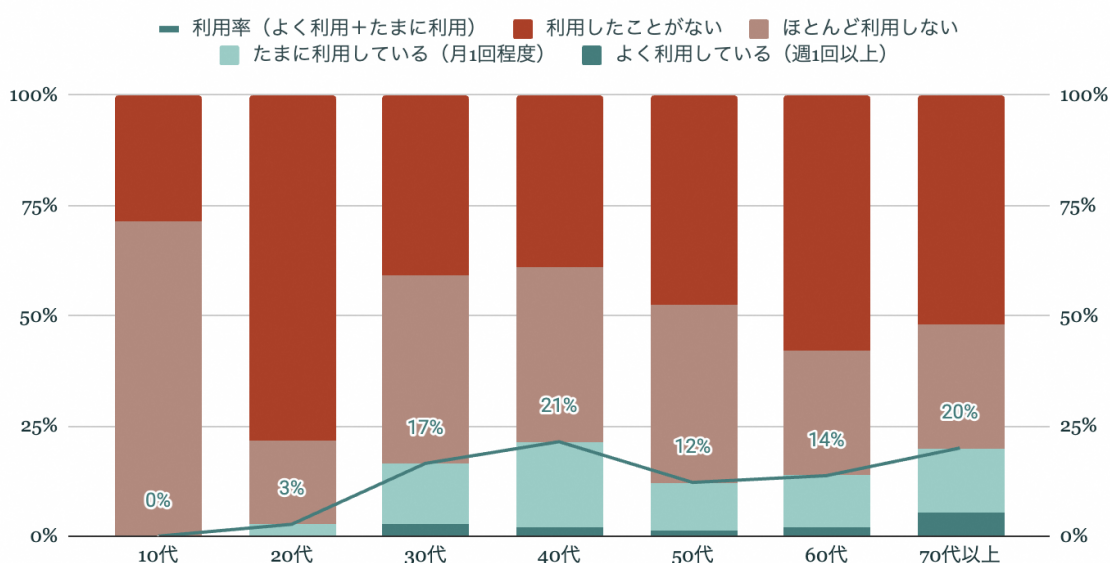
このことから、現在の利用率の低さは、図書館という機能そのものへの関心不足というよりも、

- ・施設の老朽化
- ・居心地や使い方の幅の制限、制約
- ・子ども連れで利用しにくい環境

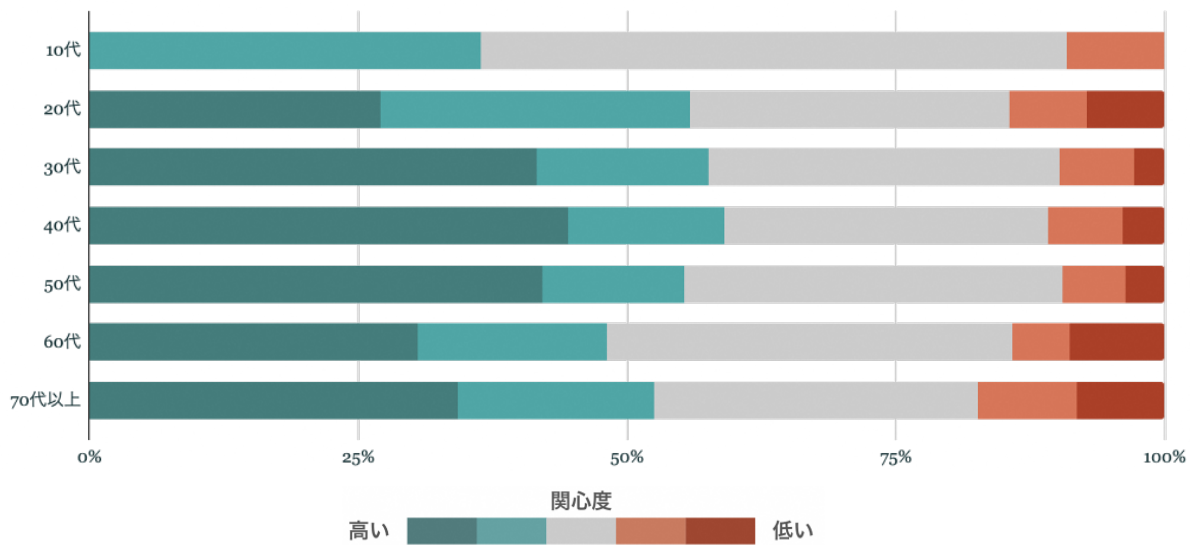
といった、環境面とのミスマッチによる可能性が考えられます。

図書館機能については、「静かに読む場所」と「人が集い、学びが広がる場」の両立が求められていることが、定量データから読み取れます。

▼男鹿市図書館の利用率



▼新施設での「読書・学習」機能に対する関心



③ 屋内こども広場の必要性

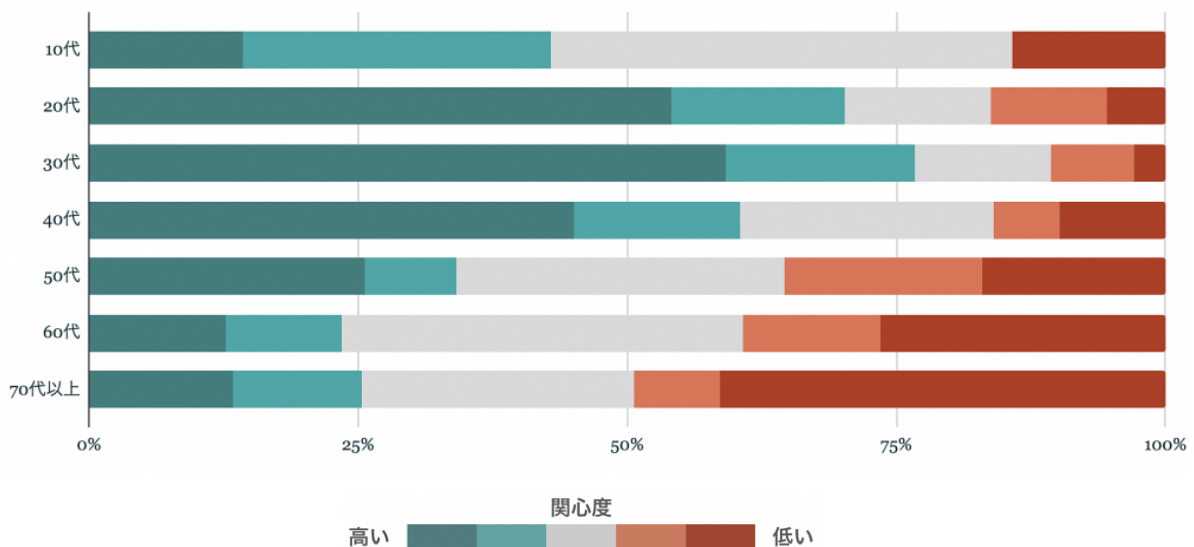
屋内遊び場の利用は、希望用途の中でも上位に位置しており、特に未就学児や小中高生のいる世帯で高い関心が示されています。

注目すべき点として、現在子育て支援センターを利用していない層からも、屋内こども広場への一定の期待が見られました。これは、既存施設の機能や場所そのものを否定するものではなく、

- ・天候に左右されずに過ごせる場所
- ・きょうだいや年齢差のある子どもと一緒に過ごせる空間
- ・保護者が安心して滞在できる環境

といった要素を含む、新しい形の子育て関連機能への期待と捉えることができます。

▼新施設での「屋内プレイパーク（子どもの遊び場）」機能に対する関心



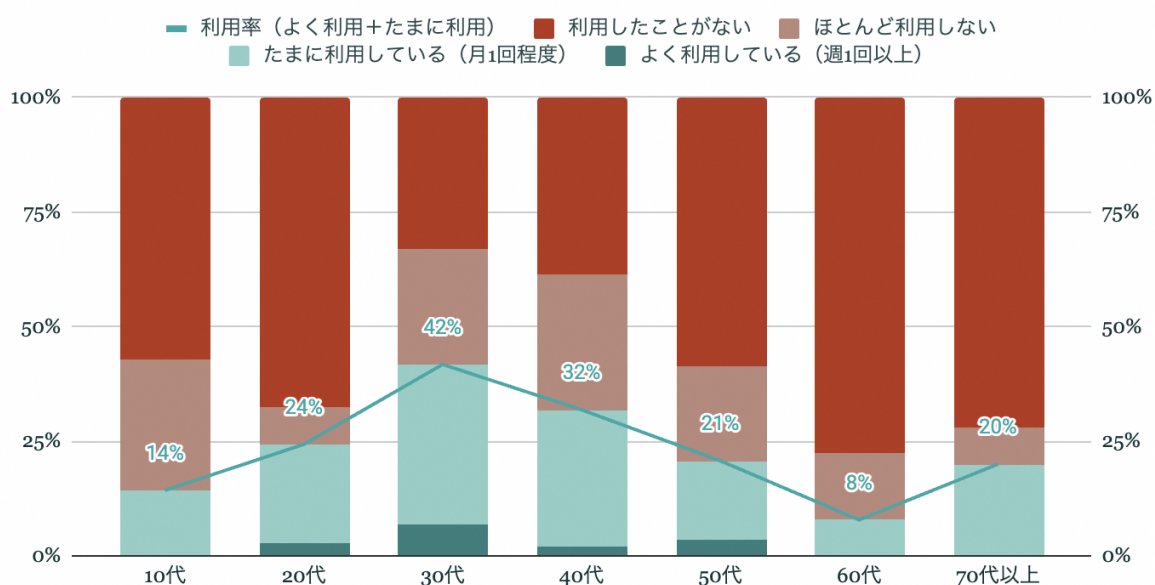
④ 他市町村施設の利用状況から見える背景

アンケートでは、男鹿市内に住みながら、子どもを遊ばせることや読書などの目的で他市町村の施設を利用している人が一定数いることも確認されました。主には、三種町子育て交流施設「みっしゅ」、八郎潟町えきまえ交流館「はちパル」、秋田拠点センターALVE 子育て交流室、秋田県立図書館、秋田市立中央図書館明德館などが多く挙げられました。

これは男鹿市内の環境を否定するものではなく、「選択肢があるなら使い分けたい」という生活者として自然な行動と考えられます。

同時に、市内にも同様の選択肢があれば利用したいと考える潜在的なニーズが存在している可能性を示しています。

▼男鹿市以外の公共施設利用割合



▼男鹿市以外の公共施設利用理由

他市町村の公共施設を利用する理由	件数
子どもが楽しめる設備や遊具があるから	156
天候が悪い日も遊ばせられるから	99
施設が新しくきれいだから	97
男鹿市内には同じような施設が無いから	90
カフェ・飲食スペースがあるから	46
借りたい本が男鹿市の図書館に無いから	41
利用時間やイベントの種類が多いから	27

⑤ 複合交流施設に求められる立地条件の傾向

アンケートでは、新たに整備する複合交流施設の立地について、複数回答可の形式で希望を尋ねました。その結果、市民が施設に求める立地条件として以下の傾向が見られました。

最も多く選ばれたのは「商業施設の近く」であり、全回答の中で高い割合を占めています。これは、買い物や外出のついでに立ち寄れる場所として、複合交流施設を日常生活の延長線上で利用したいという意識の表れと考えられます。単独で目的地として訪れる施設というよりも、他の用事と組み合わせて使える利便性が重視されていることがうかがえます。

次いで「駅の近く」が多く選択されており、公共交通によるアクセス性を重視する声も一定数存在しています。特に、高齢者や学生、市外からの来訪者にとって、分かりやすくアクセスしやすい立地であることは、施設の使いやすさに直結する要素といえます。

一方で、「幼稚園・保育園・学校の近く」「公園の近く」といった、子どもの生活動線と近い立地を希望する声も見られました。件数としては商業施設や駅周辺に比べると少ないものの、子育て世代にとっては日常の行動圏と重なる場所であることが重要な判断軸となっていることが分かります。

これらの結果から、市民が複合交流施設に求めている立地像は、

- ・生活動線の中に自然に組み込まれること
- ・公共交通や徒歩でのアクセスが分かりやすいこと
- ・子どもや家族の行動範囲とも無理なく重なること

といった条件を、単一ではなく複合的に満たす場所であると整理できます。

▼ 複合交流施設の立地希望

複合交流施設の立地希望	回答件数 (1人複数回答可)
商業施設の近く	338
駅の近く	260
幼稚園・保育園・学校の近く	148
公園の近く	106

また、アンケートからは、立地条件とあわせて駐車場の在り方に対する強い関心も読み取ることができました。特に多く見られたのは、「駐車場が十分に確保されていること」「混雑時でも停めやすいこと」「子ども連れでも安全に利用できること」といった声です。

子育て世代からは、「子どもを連れて移動するため車利用が前提になる」「雨や雪の日でも安心して使えるよう、駐車場から施設までの動線が重要」といった意見が寄せられており、屋内こども広場や図書館機能を併せ持つ施設であるからこそ、車でのアクセス性が利用頻度に直結することがうかがえます。

また、高齢者や複数世代での利用を想定した声の中には、「近くに停められないと利用をためらってしまう」「短時間でも気軽に立ち寄れるような工夫が必要」といった記述も見られました。これらは、駐車場が単なる付帯設備ではなく、施設を日常的に使ってもらうための前提条件の一つとして認識されていることを示しています。

このような声を踏まえると、複合交流施設の立地検討においては、

- ・十分な台数を確保できること
- ・子ども連れや高齢者でも安全・安心に利用できる配置・動線であること

といった点を、立地条件と一体的に検討していく必要があるといえます。

■ 自由記述に見る市民の具体的な声（定性分析）

アンケートでは、選択式の設問に加え、「どのような交流の場が増えてほしいか」「新しい複合交流施設に期待すること」について自由記述で意見を募りました。これらの回答からは、数値だけでは捉えきれない市民一人ひとりの実感や、施設に対する率直な期待、不安が読み取れます。

・子どもと安心して過ごせる場所への期待

多くの自由記述に共通して見られたのは、「子どもと一緒に安心して過ごせる場所」を求める声です。天候に左右されずに遊べる屋内空間への要望や、子どもの声や動きを過度に気にせず過ごせる環境を望む意見が繰り返し見られました。また、単に遊ぶ場としてだけでなく、親が少し休憩できること、子どもを見守りながら過ごせる居場所があることを重視する声も多く寄せられています。

これらの声からは、子ども向け施設としての機能に加え、子育て世代の生活の一部を支える場としての役割が期待されていることがうかがえます。

子どもと安心して過ごせる場所への期待

- ・ 「天候に左右されずに子どもが遊べる場所がほしい」
- ・ 「小さい子どもがいても気兼ねなく過ごせる場所がほしい」
- ・ 「子どもが多少騒いでも大丈夫な場所があるとありがたい」

・ 1 か所で用事や活動が完結する利便性への要望

自由記述では、「図書館」「子どもの遊び場」「カフェや休憩スペース」など、複数の機能を一つの場所で利用できることへの期待が多く綴られていました。

「本を借りるついでに子どもを遊ばせたい」「子どもが遊んでいる間に調べものや読書をしたい」といった声からは、移動の負担を減らし、日常の行動を効率的に組み立てたいという実感が読み取れます。

これは、忙しい子育て世代に限らず、高齢者や学生など、幅広い世代にとっても共通するニーズであり、複合化そのものへの肯定的な受け止めが背景にあると考えられます。

1 か所で用事や活動が完結する利便性への要望

- 「図書館、遊び場、休憩できる場所が一緒になっていると使いやすい
- 「子どもを遊ばせながら本を読んだり休憩できる場所があるといい」
- 「用事のついでに立ち寄れる施設があると便利」

・ 世代を問わず誰もが「居場所」を感じられる空間への要望

「若い人だけの施設にならないでほしい」「高齢者も気軽に立ち寄れる場所であってほしい」といった意見も少なくありませんでした。特定の世代や目的に限定されるのではなく、誰が来ても過ごし方を選べること、長時間いても居心地が悪くならないことを望む声が見られました。それは、市内の住民の皆さんは勿論、県内の男鹿市外からの来訪者、県外からの観光客などにも気兼ねなく使える場所であることもイメージされていると分かります。

こうした意見からは、交流を強制する場ではなく、同じ空間にしながら、それぞれが自分なりの過ごし方を選べる場への期待が感じられます。

世代を問わず「居場所」を感じられる空間への要望

- 「子どもから高齢者まで誰でも利用できる場所がほしい」
- 「一人でも気軽に行ける場所がほしい」
- 「静かに過ごしたい人も、話したい人も使える場所があるといい」

・新築整備に対する慎重な意見とその背景

一方で、新たに施設を整備すること自体に対して、慎重な意見も自由記述の中で一定数見られました。

「今ある建物を活かさないのか」「将来の維持管理が心配」「費用負担が気になる」といった声は、施設の必要性そのものを否定するというよりも、長期的な視点での不安や将来世代に対する責任感から出ているものと受け取れます。

これらの意見は、単なる新築への反対立場ではなく、整備した後、どう使われ、どう維持されるのかを重視する市民意識の表れとも言えます。そのため、今後の基本計画以降においても、整備手法の具体的な選択肢や施設の将来像を丁寧に示していくことが重要であることを示唆しています。

新築整備に対する慎重な意見とその背景

- 「新しく建てるのはいいが、維持管理がきちんとできるか心配。整備した後の運営までしっかり考えてほしい」
- 「今ある施設を活用できないのかも考えてほしい」
- 「税金を使うことなので慎重に進めてほしい」

3-2 ワークショップから得られた示唆

■実施概要

事業名	男鹿市複合交流施設整備 基本構想策定業務
企画名	複合交流施設検討にかかわる市民ワークショップ
開催日時	2026年1月17日 13:30～16:00
開催場所	男鹿市総合体育館 サブアリーナ
主催	男鹿市役所・株式会社男鹿まち企画
目的	男鹿市で検討が進む複合交流施設について、「どのように過ごしたいか」「どのような場であってほしいか」を共有し、施設のあり方を考えること。 世代や立場の異なる参加者が意見を出し合うことで、多様な過ごし方が共存できる空間の条件や、暮らす人と来訪者が自然に重なり合う場のイメージを整理し、今後の基本構想検討に活かすための視点を得ること。

本ワークショップでは、市民の多様な意見を段階的に整理するため、性質の異なる2つのワークを組み合わせ実施しました。

はじめに行ったワーク①では、子ども、子育て世代、学生、高齢者、市外からの来訪者など、さまざまな利用者像を想定し、それぞれの立場から「この施設を利用するとしたら、どのような過ごし方をしたいか」「どのような要素があれば使いたくなるか」を自由に挙げていただきました。このワークは、特定の機能や空間の結論を導くことを目的としたものではなく、多様な利用者ごとに異なる価値観や期待を広く可視化することを目的としています。

続くワーク②では、ワーク①で挙げられた多様な過ごし方や利用イメージを前提に、それぞれが1つの複合交流施設の中でどのように共存し得るのかについて意見交換を行いました。動線や空間の使い分けといったハード面の工夫に加え、運営やルール、人の関わり方といったソフト面の視点からも、共存を成立させるためのアイデアが出されました。

このように、本ワークショップでは、①多様な利用者それぞれの使いたくなる要素を抽出する段階と、②それらを共存させるための考え方や工夫を探る段階、を分けて整理することで、市民の意識をより立体的に把握する構成としています。

これら2つのワークを通じて得られた意見は、基本構想段階において機能やゾーニングを決定するための材料ではなく、基本構想以降の検討フェーズで具体的な検討を行う際の判断軸や留意点として活用することを想定しています。

■多様な利用者像と「使いたくなる要素」

ワーク①では、子ども、子育て世代、学生、高齢者、市外からの来訪者など、さまざまな利用者像を想定し、それぞれの立場から「この施設を使うとしたら、どのように過ごしたいか」「どのような要素があれば使いたくなるか」について意見を出し合いました。

その結果、静かに読書や学習に集中できる環境、子どもが声を出して遊べる場所、短時間でも立ち寄れる気軽さ、飲食や休憩ができる居心地のよさなど、多様な過ごし方が示されました。また、特定の目的がなくても「何もしなくてもいられる場所」であることを求める声も多く見られました。

これらの意見からは、利用者ごとに求める機能が異なる一方で、単一の目的に特化した施設ではなく、さまざまな使い方を受け止められる柔軟さが重視されていることがうかがえます。ワーク①は、こうした多様な利用者それぞれにとっての「使いたくなる要素」を可視化する役割を果たしました。

1. 子育て世代・未就学児を連れた利用者の過ごし方

子育て世代からは、「子どもと一緒に安心して長時間過ごせる場所」への期待が多く挙がりました。

- 子どもが走れるスペース
- 声を出しても大丈夫
- 子どもが遊んでいる間に大人の時間も取れるような場所
- 子どもが寝転がれるような場所

遊びと学び、静と動を切り分けながらも、同じ施設の中で行き来できること、大人も子どもも無理なく過ごせることが重視されていました。

2. 小学生高学年～中学生の過ごし方

子どもだけでも利用できる「自立的な居場所」への期待も多く見られました。

- 放課後や休日など、子どもだけでも遊びに行ける場所
- 学校の宿題ができるような場所
- 小・中学生の学習支援になるような場所

大人に管理されすぎず、安心感の中で自由に過ごせる場所、勉強と遊びのどちらも選べる場所が求められていることがうかがえました。

3. 学生・若者・働く世代の過ごし方

学生や働く世代をイメージした声として、集中と交流の両立ができる環境への期待が示されました。

- 図書館で一人で集中する
- 勉強出来るスペースがあること
- Wi-Fiが完備されていて、仕事や学習が出来る

用途を固定しすぎない柔軟な居場所が求められていました。

4. 大人・高齢者を含む幅広い世代の過ごし方

年齢を問わず利用できる「落ち着き」と「居心地」も重要な要素として挙げられています。

- 一人でも来やすい
- 何かのついでにちょっと休憩できる
- 何もしなくてもいられる場所

静かに過ごす時間と、人の気配を感じる時間の両方が選べることが、居心地の良さにつながると捉えられていました。

5. 市外からの来訪者・初めて訪れる人の過ごし方

市外の人や初めて男鹿を訪れる人を想定した意見も複数見られました。

- 市外の人でもわざわざ来てくれるような場所
- 男鹿の文化や魅力を知ることができる
- ナマハゲのことを知ってもらうことができる

日常利用の場でありながら、男鹿らしさに触れられることが、来訪者にとっての立ち寄る理由になると考えられていました。

6. 過ごし方を支える共通要素

すべての利用者像に共通して、以下のような要素が重ねて語られていました。

- 短時間でも立ち寄れる
- 飲食ができる・持ち込みができる
- みんなでご飯を食べることができる
- 子どもからお年寄りまでが使うことを想定した設備の整備がされている

滞在時間や目的を限定しないこと、誰にとっても無理のないアクセスと使いやすさが、施設全体の前提条件として共有されていました。

■共存を成立させるための工夫

ワーク②では、ワーク①で挙げられた多様な過ごし方や利用イメージが、同じ施設の中でどのように共存し得るのかについて意見交換を行いました。

静かな活動とにぎやかな活動が同時に存在することを前提に、音や視線の配慮、空間のゾーニング、雰囲気づくりといった工夫が多く挙げられました。また、空間だけでなく、利用ルールの考え方やスタッフの関わり方、見守りのあり方など、運営面の工夫が共存を支える重要な要素であることも共有されました。

さらに、子どもや高齢者など自ら移動手段を持たない人でも利用しやすいよう、交通手段やアクセスに関する運用面の工夫を求める声もありました。

このことから、複合交流施設の使いやすさは建物の設えだけでなく、運営や周辺環境との関係性を含めて考える必要があることが示されました。

1. 落ち着きとにぎわいが共存する空間への要望

多くの意見に共通していたのは、「静かに過ごしたい人」と「にぎやかに過ごしたい人」のどちらもが、同じ施設の中で無理なく過ごせることへの期待でした。

静かに読書や勉強、仕事に集中できる空間がある一方で、子どもが声を出して遊べる場所や、人と会話を楽しめるスペースも必要だという意見が出されました。これらは完全に分断されるのではなく、音や雰囲気、照明、床材などの工夫によって、緩やかにゾーン分けされていることも解決策の1つとして考えられます。

2. 年齢や立場に応じて使い分けられる場づくり

子どもから高齢者まで、幅広い世代が利用することを前提に、年齢やライフステージに応じた配慮を求める声が多くありました。

乳幼児向けのスペースや授乳・おむつ替えへの配慮、小学生以上が安心して遊んだり学んだりできる場、また大人が落ち着いて過ごせる場所など、同じ施設の中で自然に居場所を見つけられることも重要な要素として挙げられました。子どもを見守りながら大人が自分の時間を持てる構成も、多くの参加者が共感するポイントでした。

3. 飲食・休憩が「滞在を支える」機能になること

飲食機能については、「食事が目的」というよりも、長く居られるための支えとして必要という位置づけで意見が出されました。

コーヒーを飲みながら会話をしたり、食事を挟みながら一日過ごしたりできることで、施設全体の滞在時間や使い方の幅が広がるという意見が多く見られました。「何もしなくてもいられる」「ただ座って休める」といった声からは、目的を持たなくても利用出来る場への期待が感じられました。

4. 使いやすさを左右する動線・設備・安心感

施設の魅力は、空間の雰囲気だけでなく、使いやすさや安心感によって大きく左右されるという意識も話題に出ました。

バリアフリーへの配慮、ベビーカーや車椅子での移動のしやすさ、分かりやすい動線、清潔さや衛生管理など、基本的な条件を丁寧に整えることが重要だという意見が挙げられています。また、利用ルールや案内が分かりやすいこと、困ったときに相談できる人や仕組みがあることも、安心して利用するための要素として検討することができそうです。

5. 日常利用と特別な利用の両立

毎日のように使える場所であると同時に、特別な体験や出会いがある場所であってほしいという声も聞かれました。

普段は静かに過ごせる空間でありながら、展示やイベント、ワークショップなどが行われることで、いつ訪れても新しい発見があることが期待されています。また、市民だけでなく、市外から訪れる人にとっても男鹿らしさを感じられる場になることが望ましいとされました。

6. 運営や人の関わり方、アクセスを含めた「居心地」の設計

多様な人々に使われる施設になるためには、運営のあり方や人の関わり方、さらには施設への行き来のしやすさも含めてつくられるものである、という話題も共有されました。

時間帯による使い方の切り替えや、自由に使える時間と予約が必要な利用の使い分け、情報発信や地域との連携など、運営面での工夫が重要だという意見が挙がっています。

また、施設の使いやすさを左右する要素として、交通手段やアクセス方法に関する意見も複数出されています。特に、子どもや高齢者など、自ら移動手段を持たない人でも利用しやすい施設であることが重要だという指摘がありました。循環バスや公共交通との連携、送迎や立ち寄りやすい動線の工夫など、運用面での配慮によって利用のハードルを下げることが求められていることがうかがえます。

こうした意見からは、「どうやって来られるか」「どうすれば日常的に利用できるか」まで含めて考えることが、居心地の良さにつながるという考え方が示されています。

■ ワークショップ当日の様子



3-3 市民ニーズの総括

■アンケートとワークショップから見えた共通点

アンケートによる定量的な傾向と、市民ワークショップでの対話から得られた定性的な意見を総合すると、市民ニーズには多様でありながら、根底では重なり合う共通点が存在していることが確認されました。

年代や家族構成、立場によって重視する要素には違いが見られるものの、安心して過ごせることや、自分なりの居場所を感じられること、日常の延長として無理なく使えることは、多くの市民に共通する価値観でした。

■市民ニーズの特徴①：分けるより共存することへの期待

市民の声からは、子ども向け、高齢者向けといった特定の世代や目的に限定された施設像よりも、世代や利用目的が異なる人々が、同じ場所に居合わせられる環境への期待が強く読み取れます。

静かに過ごしたい人、にぎやかに活動したい人、短時間立ち寄る人、長く滞在する人など、異なる過ごし方が同時に成立することが望まれており、明確な機能分断ではなく、空間の雰囲気や居場所の選択によって自然に棲み分けが生まれる施設像が志向されていました。

■市民ニーズの特徴②：日常性と非日常性の重なり

アンケートおよびワークショップでは、市民にとって日常的に利用できる場であることを前提としつつ、市外からの来訪者や観光客にとっても立ち寄りやすい場所であってほしいという意識が見られました。

これは、市民施設と観光施設を明確に切り分けるのではなく、男鹿の暮らしや日常そのものが、自然な形で外の人にも開かれる拠点への期待と捉えることができます。

地域の文化や暮らしに触れられる要素が、特別な演出ではなく日常の中に存在することで、市民にとっての誇りや愛着の醸成と、来訪者にとっての理解促進の双方につながる可能性があります。

■市民ニーズの特徴③：ハードと運営を一体で考える視点

市民の意見からは、施設の使いやすさは建物や設備といったハード面だけでなく、運営方法や人の関わり方、交通・アクセス手段を含めて考える必要があるという認識が共有されました。

特に、子どもや高齢者など、自ら移動手段を持たない人でも利用しやすい工夫や、気軽に立ち寄れる運用上の配慮は、施設の利用頻度や満足度を左右する重要な要素として挙げられます。

第4章 複合交流施設のコンセプトと基本方針

4-1 先行事例から得られた知見

男鹿市の複合交流施設を検討するにあたり、先行事例の調査では、単に施設の規模や外観を比較するのではなく、男鹿市が抱える課題に対して、どのような工夫がなされているかの観点から整理を行いました。

本構想では、特に以下の3つの軸を設定し、各事例を調査・分析しています。

① 図書館と子どもエリアが共存する先行事例

男鹿市では、図書館機能の更新とあわせて、雨天時や降雪時でも子どもが安心して過ごせる屋内空間の整備が求められています。一方で、図書館には静かな読書環境を求める利用者も多く、子どもを含む多様な利用者が同じ施設を快適に使える空間構成が重要なテーマとなっています。

そのため、図書館と子どもエリアを同一の施設内で共存させている事例に着目しました。この軸は、子育て世代が安心して利用できることと、従来の図書館利用者にとっての居心地を両立させるために重要な視点です。

② 交流を深める先行事例

複合交流施設は、人と人が直接的に交流すること自体を目的とする場ではなく、男鹿ならではの文化や、日常の営みに触れる体験を通じて、結果として地域の人と来訪者の距離が縮まっていく場であることが重要と考えられます。

男鹿市は、豊かな自然や歴史、食文化、民俗行事など、多様な地域資源を有しており、観光などを目的に市外・県外から訪れる人々も少なくありません。こうした来訪者にとって、地域の文化や暮らしを感じられる場所があることは、滞在の質を高めるだけでなく、男鹿への理解や愛着を深めるきっかけにもなります。

一方で、市民にとっても、自分たちの文化や日常がさりげなく表現され、共有される場があることは、地域への誇りや再認識につながります。この軸は、観光と市民生活を切り分けるのではなく、日常の延長線上に来訪者が重なる環境をつくるための重要な視点として位置付けました。

③ 持続的な運営を可能にする仕組み

男鹿市の複合交流施設は、整備すること自体が目的ではなく、長期にわたって使われ続け、地域に根付いていくことが重要です。

人口減少や財政制約がある中で、運営面まで含めて無理のない施設のあり方を検討することが不可欠となります。

そこで、行政単独での運営に依存せず、市民参加や外部団体との連携、有料機能の導入などを通じて、持続的な運営を実現している事例に着目しました。

① 図書館と子どもエリアが共存する先行事例

施設名	くるんと
住所	山形県長井市本町1丁目1-1
開業年月	2023年9月
面積	敷地面積：約23,351㎡、延床面積：約5,741㎡
主な機能	図書館、子育て支援センター、カフェ
運営	株式会社エムシーアイ（指定管理）（カフェはテナント貸し）

施設名	ホントカ。
住所	新潟県小千谷市本町1丁目13-35
開業年月	2024年9月
面積	敷地面積：約107,000㎡、延床面積：約4,628㎡
主な機能	図書館、郷土資料展示、交流・創造・子育て支援、カフェ
運営	小千谷市（カフェはテナント貸し）

図書館と子どもエリアを同一施設内に併設する際の最大の論点は、「静けさを守る」か「子どもの自由さを守る」かという二項対立ではなく、世代の異なる利用者が互いに無理なく共存できる距離感をどうつくるかにあります。今回視察した「くるんと」と「ホントカ。」は、ともに図書機能と子どもの遊び・滞在機能を内包しながらも、空間の切り分け方と遊びの設計思想が対照的で、男鹿市での検討にとって重要な示唆が得られました。

「くるんと」は、屋内の遊び場と図書館を備える複合施設で、子育て支援施設やカフェ等も含めた遊びと学びの交流施設として位置づけられています。施設案内上も、屋内の遊び場と図書館エリアが明確に整理され、遊び場にはボールプールや大型遊具、ブロック・積み木、乳幼児向けエリアなど、遊び方が直感的に分かりやすいコンテンツが用意されています。

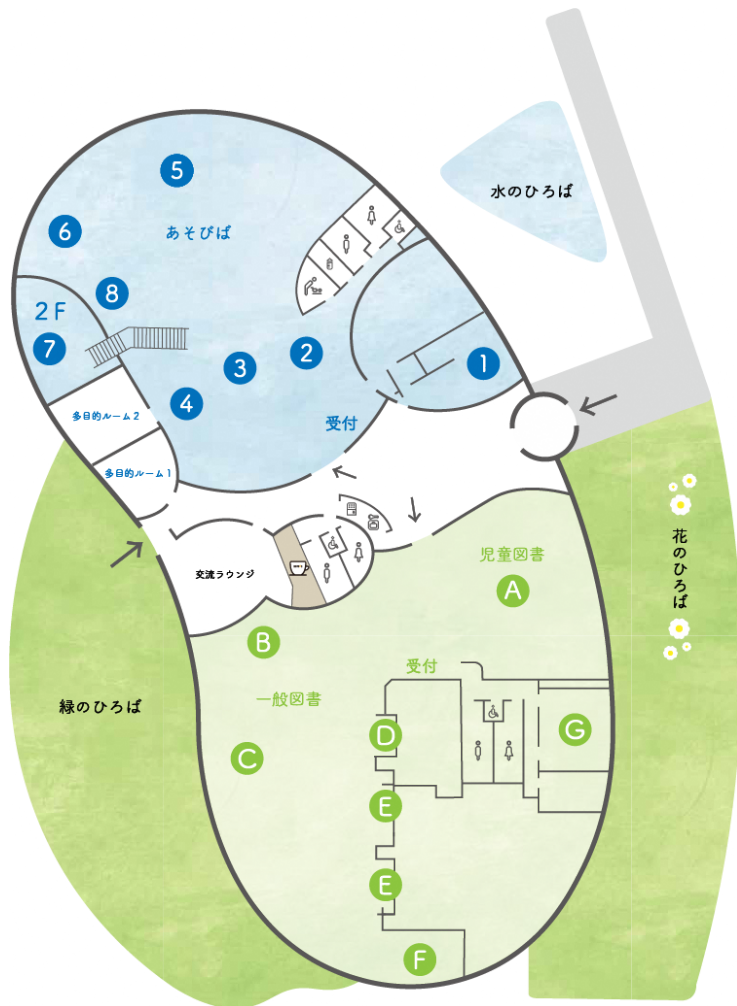


▲ボールプールやけん玉の貸出など、直感的に分かりやすい遊具で構成されている。

現地での体感としても、図書館空間と屋内こども広場空間は扉で明確に仕切れ、間に通路を挟むことでゾーニングが分かりやすい構成でした。一方で、両者がワンフロアの中で隣り合って成立しているため、利用者の動線や気配は緩やかにつながり、子どもから大人まで幅広い世代が同じ施設に同居している感覚が生まれていました。

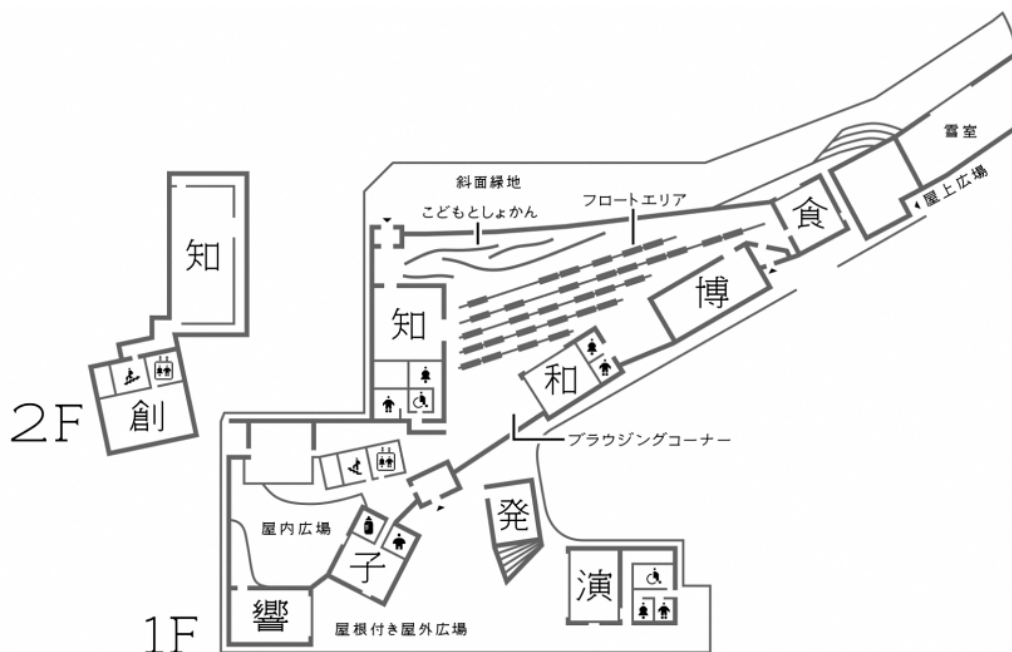


▲右が屋内遊び場、左が図書館で、通路スペースによって明確にゾーニングされている。



▲ くるんとフロアマップ
 (出典：くるんと公式webページ：<https://kurunto.jp/>)

対して「ホントカ。」は、図書館と郷土資料館、市民活動の場、子どもの遊び場などが混じり合って生まれた拠点です。現地では、図書空間と子どもの屋内遊び場が扉で分断されず、居場所の質の違いによって緩やかにゾーニングされており、学習する学生、読書する市民、遊ぶ子どもが同時に存在しながらも、互いの過ごし方が大きく衝突しない共存の風景が成立していました。



▲ ホントカ フロアマップ

(出典：ホントカ公式webページ：<https://hontoka.city.ojija.niigata.jp/floor-map>)

印象的だったのは、木製の丘のような起伏や、迷路のように回遊できる空間が「遊び方を子どもに委ねる」設計になっていたことです。固定化された遊具で遊び方を指定するのではなく、子どもがその場で発見し、試し、工夫する余地が残されていました。



▲屋内遊び場空間

(出典：ホントカ公式webページ：<https://hontoka.city.ojya.niigata.jp/floor-map>)



▲迷路のような空間。子どもたちは隙間を見つけては潜り込んだり、隠れたりしていた。

この2施設を比較すると、図書館と子どもエリアの共存には少なくとも2つの設計アプローチがあることが分かります。ひとつは「くるんと」のように、扉や通路でゾーンを明快に分けつつ、同一フロア内で近接させることで、安心感と分かりやすさを担保しながら、世代の混在をつくる方法です。もうひとつは「ホントカ。」のように、明確な境界を設けず、空間の質（起伏・家具・居場所の性格など）で緩やかに分けることで、多様な過ごし方が同時に成立する方法です。

さらに、「遊びの設計思想」にもグラデーションがありました。「くるんと」はボールプールや遊具、道具の用意により遊び方が分かりやすい環境を厚くすることで、初めて訪れる家庭でも使いやすい一方、「ホントカ。」は起伏や回遊性を通じて子どもたちに遊び方を委ねることで、子どもの創造性や主体性を引き出す余白が大きい構成でした。男鹿市で屋内こども広場を検討する際も、年齢層（未就学児中心か、小学生も含むか）や、運営体制（見守りの厚み、道具管理の可否）に応じて、「分かりやすい遊び」と「委ねる遊び」をどう配合するかが、利用満足度と運営負荷の両面から重要な検討ポイントになるといえます。

図書館と子どもエリアの共存に関するまとめ：

図書館と子どもエリアの共存は、
・境界のつくり方（明快／緩やか）と、
・遊びの設計思想（分かりやすい／委ねる）
の組み合わせで考えることができます。

男鹿市では、想定する利用層と運営の見守り体制に合わせて、最適な配合を検討することが重要と考えられます。

② 交流を深める先行事例

施設名	本の森ちゅうおう
住所	東京都中央区新富1丁目13-14
開業年月	2022年12月
面積	敷地面積：約4,000㎡、延床面積：約8,881㎡
主な機能	図書館、郷土資料展示、多目的ホール、屋上庭園、カフェ
運営	株式会社図書館流通センター（カフェはテナント貸し）

「本の森ちゅうおう」は、図書館を単なる貸出・閲覧の場としてではなく、地域の文化や知に触れることを通じて、人とまちの関係性を育む拠点として再定義した先行事例です。東京都中央区という都市部に立地しながらも、地域外の来訪者と地域住民が同じ空間を共有し、それぞれの立場で居心地よく過ごせる場が意識的につくられています。

特徴的なのは、図書館機能の中に、地域の歴史や文化を伝える展示や情報発信の要素が常設的に組み込まれている点です。郷土資料やテーマ展示が閲覧空間と地続きに配置されることで、利用者は意識せずとも地域の背景や物語に触れることとなります。これにより、地域住民にとっては自分たちの暮らしや文化を再発見する場となり、来訪者にとってはその地域を理解する入口として機能しています。



▲図書館内に常設されている郷土資料館

また、館内の居場所づくりにも細やかな配慮が見られました。共用エリアに設置されている椅子は座面が低めに設計されており、子どもから高齢者まで無理なく腰掛けることができるなど、幅広い年齢層を想定した工夫がなされています。加えて、各階にはベンチが多く配置されており、短時間の立ち寄りだけでなく、長時間滞在にも対応できる環境が整えられていました。

こうした設えにより、個人で静かに読書をする人、子どもと一緒に過ごす家族、休憩や待ち合わせで立ち寄る来訪者など、利用目的や滞在時間の異なる人々が同じ空間に自然に共存する様子が見受けられました。その結果、地域の人と観光客、日常的な利用者と一時的な来訪者が同じ場に居合わせても、互いに違和感なく過ごせる空間が形成されていると感じられました。



▲左) 幅広い年代に対応する座面の低い家具 / 右) 多くのベンチが設置されている。

交流を深めることに関するまとめ：

本の森ちゅうおうの事例からは、

- ・地域の文化や背景に触れられる環境
- ・長く滞在できる居場所を整えること

が、交流の土台になることが読み取れます。

日常利用者と来訪者が同じ空間に自然に居合わせることで、無理のないかたちで地域内外の人が交わる状況が生まれていました。

男鹿市においても、文化への気づきと居心地の良さを両立させることで、日常と来訪が重なり合う交流環境をつくることが可能だと考えられます。

③ 持続的な運営を可能にする仕組み

施設名	ターントクルこども館
住所	静岡県焼津市栄町5丁目1-1
開業年月	2021年7月
面積	敷地面積：約1,614㎡、延床面積：約2,754㎡
主な機能	図書館（図書館法に則らない施設）、おもちゃ美術館、カフェ
運営	一般社団法人やいづ子育て・多世代交流支援協会ことこと（指定管理）（カフェはテナント貸し）

焼津市の「ターントクルこども館」は、子どもの遊び・学び・読書を中心に、多世代が日常的に集う複合施設として整備されました。本施設の中核をなす「おもちゃ美術館」は、全国各地に展開されているネットワーク型の施設であり、展示手法、運営ノウハウ、人材獲得・育成の仕組みが体系化されている点に大きな特徴があります。

こうした全国的な枠組みに参加することで、個別自治体がゼロから運営モデルを構築する負担を軽減しつつ、一定水準のサービス品質を維持できる点は、公共施設運営において有利な点と考えられます。

運営面では、入館料の料金設定や、ミュージアムショップが併設することで、公共施設でありながら無料であることを前提としない運営が実践されています。施設の価値を分かりやすく伝え、その対価を得る仕組みを取り入れることで、施設の維持や改善に必要な財源を確保し、結果として利用環境の充実につながっています。

本施設の運営主体は、「一般社団法人やいづ子育て・多世代交流支援協会ことこと」です。ターントクルこども館は、当初から民間主体として設立されたものではなく、焼津市が直営で施設を立ち上げ・運営した期間を経た後に民営化されています。

直営時代から施設運営に関わってきた職員やスタッフが、一般社団法人の運営にも引き続き関与することで、施設の理念や運営上の知見、人と人との関係性が途切れることなく引き継がれています。こうした移行のプロセスにより、公共性と運営の柔軟性の両立が図られています。

全国に広がる姉妹おもちゃ美術館

 花巻おもちゃ美術館 岩手県花巻市(2020)	 木曾おもちゃ美術館 長野県木曾町(2022)	 佐川おもちゃ美術館 高知県佐川町(2023)
 埼玉おもちゃ美術館 埼玉県三郷市・吉川市(2025)	 奈良おもちゃ美術館 奈良県三郷町(2025)	 長門おもちゃ美術館 山口県長門市(2018)
 東京おもちゃ美術館 東京都新宿区(1985)	 讃岐おもちゃ美術館 香川県高松市(2022)	 福岡おもちゃ美術館 福岡県福岡市(2022)
 檜原森のおもちゃ美術館 東京都檜原村(2021)	 徳島木のおもちゃ美術館 徳島県(2021)	 やんばる森のおもちゃ美術館 沖縄県国頭村(2014)
 焼津おもちゃ美術館 静岡県焼津市(2021)	 那賀町山のおもちゃ美術館 徳島県那賀町(2023)	



※ () 内の数字は開館年度です。

- ▲ 全国に14のおもちゃ美術館が開館している
(出典：おもちゃ美術館公式webページ：<https://art-play.or.jp/area/>)



- ▲ 地域の木材を利用した施設は、木育拠点としても機能している。

継続的な運営に関するまとめ：

- ・全国的に展開されている仕組みを適切に取り入れること
 - ・利用価値に応じた料金設定を行うこと
 - ・直営から段階的に運営主体を移行すること
- により、人材やノウハウを継続的に活かすことは、限られた財源や人員の中で施設を維持していく上で、男鹿市においても検討の対象となり得る考え方です。

4-2 基本コンセプト

本基本構想における複合交流施設は、特定の世代や目的に限定された施設ではなく、多様な人々の暮らしや時間が、無理なく重なり合う場として位置づけます。

第2章で整理した男鹿市の現状や課題、第3章で明らかになった市民ニーズからは、誰のための施設かを絞り込むことよりも、それぞれ異なる立場や目的を持つ人が、同じ空間に居合わせられることへの期待が共通して見られました。

また、先行事例調査（4-1）からは、図書館や子ども向け機能といった異なる性質の空間であっても、明確に分断するのではなく、使い方や雰囲気の違いによって自然に共存が成立している事例が確認されました。

これらを踏まえ、本構想では、**未来を担う世代を育む、地域の多様な暮らしが重なり合う拠点**という考え方を、複合交流施設の基本コンセプトとして設定します。

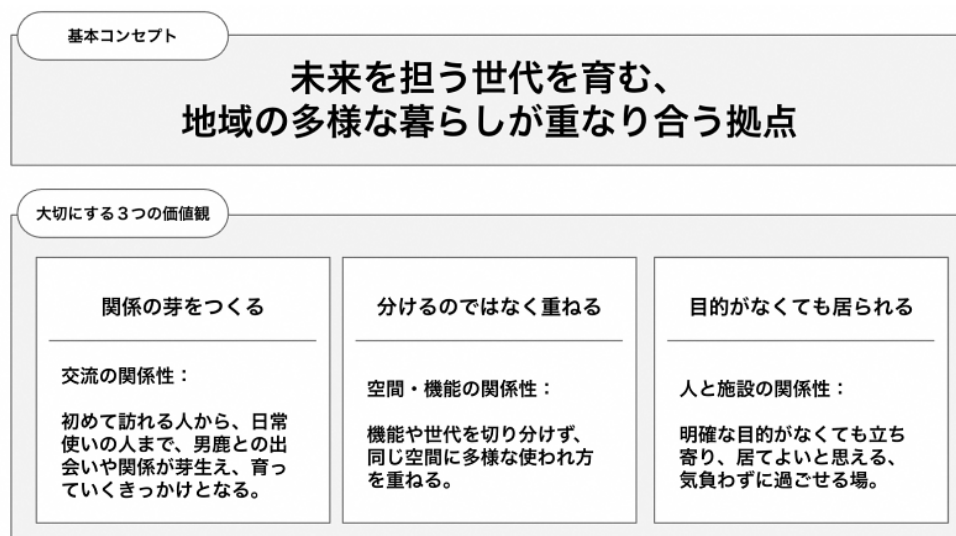
本施設は、子どもから高齢者、市内外の来訪者まで、立場や目的の異なる人々が同じ空間を共有しながら関わりを重ねることで、男鹿の未来につながる関係を育んでいく拠点です。単に機能を集約する施設ではなく、人と人、日常と未来が交わることで、新たな関係の芽が生まれ、それが将来へとつながっていく場であることを目指します。

ここでいう「未来を担う世代」とは、子どもや若者に限らず、これからの男鹿をともにくわいていくすべての人を含む概念です。子どもを起点としながらも、保護者、高齢者、学生、働く世代、市外からの来訪者など、誰か1人を主役にするのではなく、多様な利用者を想定することを重視します。

また、本施設は「特別な目的があるときだけ訪れる場所」ではなく、買い物や通学、散歩の途中など、日常の延長線上で自然に立ち寄れる場であることを目指します。

その結果として、地域の人々の日常と、市外・県外から訪れる人の時間が緩やかに重なり、男鹿の文化や暮らしに触れるきっかけが生まれていくことを意図しています。

今後の基本計画・設計へとつなげていくため、「関係の芽をつくる」「分けるのではなく重ねる」「目的がなくても居られる」という価値観を、施設全体のコンセプトを構成する要素として設定します。



4-3 基本整備方針

本複合交流施設の整備にあたっては、基本コンセプトおよび3つの価値観を具体化するため、以下の観点を基本整備方針として整理します。これらは、個別機能や詳細なゾーニングを確定するものではなく、今後の基本計画・設計段階において判断を行うための共通の判断軸として位置づけるものです。

■ 安全性・安心感を最優先とした整備

子どもから高齢者まで、幅広い世代が利用する施設であることから、安全性の確保を最優先の前提条件とします。特に、屋内こども広場や滞在空間においては、見通しの確保や死角の少ない構成、スタッフや周囲の大人の目が自然に届く環境づくりを重視します。

また、初めて訪れる人や市外からの来訪者にとっても不安を感じにくいよう、空間の分かりやすさや心理的な安心感にも配慮した整備を検討します。

■ 利用のしやすさと使いやすさの確保

誰もが無理なく利用できる施設とするため、段差の解消、スロープやエレベーターの設置、十分な通路幅の確保など、ユニバーサルデザインの考え方を基本とします。

また、子どもや高齢者、自ら移動手段を持たない人でも利用しやすいよう、公共交通や送迎、将来的な運用面での工夫も視野に入れた整備方針とします。施設単体で完結するのではなく、まちの移動環境と連動して考える視点を持つことを重視します。

■ 分けるのではなく重ねる空間構成

図書館、屋内こども広場、交流スペースなどの機能は、明確に切り分けるのではなく、音や雰囲気、使われ方の違いによって緩やかに共存する構成を基本とします。

静かに過ごす場所と、にぎわいのある場所が同じ施設内に存在しながらも、互いを排除せず成立する関係性を意識し、空間の連続性や視線の抜け、居場所の多様性を重視します。

■ 運営と一体で考える整備の考え方

本施設の整備にあたっては、ハード（建物・空間）と運営を切り離して考えるのではなく、将来の運営方法や人の関わり方を見据えた上で整備方針を定めます。

イベントやプログラムの実施、日常的な見守りや声かけ、外部との連携など、運営によって空間の価値を育てていくことを目指し、使い方が固定化されすぎない、運営の工夫を持った施設として整備していきます。

4-4 中核機能の位置づけ

本施設における中核機能は、単に必要な機能を並べるものではなく、3つの基本コンセプトを、日常的に体現する存在として位置づけます。

図書館機能および屋内こども広場は、それぞれ独立した用途を担いながらも、施設全体の雰囲気や人の流れを形づくる中核として、相互に関係し合うことを重視します。

■図書館機能の位置づけ

図書館は、本を読む・借りる場にとどまらず、誰もが目的の有無にかかわらず居られる、開かれた居場所として位置づけます。

静かに読書や学習に集中できる環境を確保しつつも、交流スペースやこどもエリアと完全に切り離すのではなく、同じ空間の中で異なる過ごし方が重なり合う構成を目指します。

男鹿に関する資料やテーマ展示などを通じて、地域の文化や暮らしに触れるきっかけをつくり、地域の人にとっては身近な情報を再確認する場として、来訪者にとっては男鹿を知る入り口となる役割を担うことも考えられます。

■屋内こども広場の位置づけ

屋内こども広場は、単なる遊び場ではなく、子どもを中心に、多様な世代の関係が生まれる場として位置づけます。天候に左右されず安心して遊べる環境を確保しながら、子どもだけを隔離するのではなく、大人が見守り、くつろぎ、同じ時間を共有できる構成を重視します。

遊びの内容についても、与えられた遊具だけで完結するのではなく、創造性や主体性を引き出す余白を残すことで、成長段階や関わり方に応じた多様な使われ方を想定します。

この機能は、子育て世代のためだけのものではなく、地域の日常に子どもの存在が自然に溶け込む環境をつくることで、施設全体のにぎわいと安心感を支える役割を果たします。

■中核機能同士の関係性

図書館機能と屋内こども広場は、静けさと賑わいを分断する関係ではなく、同じ施設の中で異なる過ごし方が共存する関係として捉えます。

音や視線、距離感、居場所の配置によって緩やかに調整することで、互いを分断せず、それぞれの価値を高め合う構成を目指します。

この関係性そのものが、本施設が目指す「分けずに重ねる」空間の象徴であり、多様な人が自然に居合わせる風景を生み出す基盤となります。

男鹿市複合交流施設 中核機能のポイント

施設の土台となる方針



安全・安心を最優先

子どもから高齢者まで、見通しが良く誰もが安心して過ごせる環境とする。



分けるのではなく重ねる空間構成

静けさと賑わいが緩やかに共存し、多様な居場所を生み出す。



誰もが使いやすいユニバーサルデザイン

公共交通機関との接続や、施設内の段差など、利用のしやすさを確保する。



運営と一体で考える施設整備

将来の運営方法や人の関わり方を見据えた上で整備方針を定めます。

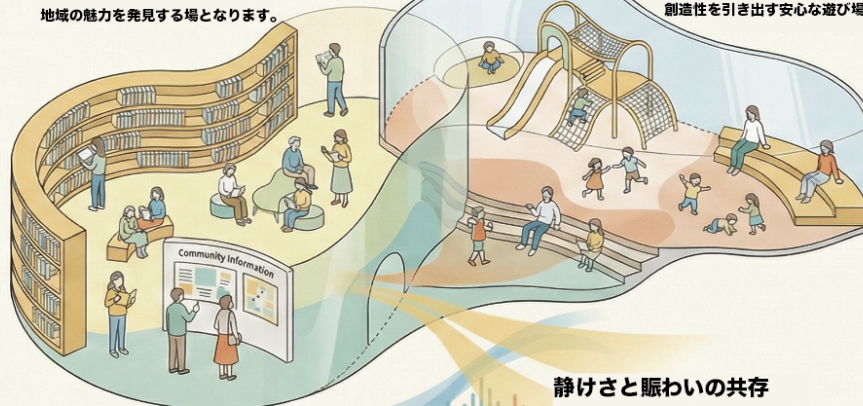
中核機能が体现する重ねるデザイン

新しい図書館：本を借りるだけじゃない開かれた居場所

静かな読書空間と交流エリアが共存し、地域の魅力を発見する場となります。

屋内子ども広場：多世代が繋がる子ども中心の交流の場

大人が見守りながらくつろげる、創造性を引き出す安心な遊び場。



静けさと賑わいの共存

図書館と屋内子ども広場は分断されるのではなく、互いの価値を高め合う関係を目指します。

4-5 付帯機能の考え方

本施設における付帯機能は、図書館や屋内こども広場といった中核機能の使われ方を広げ、重なり合いを生み出すための要素として位置づけます。

特定の用途に固定するのではなく、日常利用から滞在、交流、来訪者対応までを柔軟につなぐ役割を担うものとします。

■ 交流・滞在スペース

交流スペースや滞在空間は、目的を持って訪れた人だけでなく、偶然立ち寄った人や、次の行動を考える途中の人も受け止める「余白」として整備します。

読書の合間に休憩する、子どもを見守りながら過ごす、誰かと待ち合わせをするなど、中核機能の前後に自然につながる居場所として機能することを想定します。

■ 飲食・休憩に関わる機能

カフェや軽飲食、持ち込み可能な休憩スペースなどは、長時間滞在を可能にし、施設全体の居心地を高める役割を担います。

学びや遊び、交流といった活動を中断させるのではなく、行為と行為の間をつなぐ存在として位置づけ、世代を問わず利用しやすい形を検討します。

■ 観光・情報発信に関わる機能

観光情報や地域情報に関する機能は、来訪者向けの案内にとどまらず、地域の人にとっても身近な情報を再確認できる場として活用します。

展示や案内、イベント等を通じて、日常の延長線上で男鹿の魅力に触れるきっかけを生み出し、来訪者と地域の日常が自然に重なる関係性を支えます。

■ 多目的利用・活動を支える機能

会議室やレンタルスペース、可変的に使える空間などは、講座やワークショップ、サークル活動など、多様な活動を受け止める基盤として位置づけます。

あらかじめ用途を限定しすぎるのではなく、運営や市民の関わり方によって使われ方が育っていく余地を残した整備を行います。

第5章 候補地比較と立地方針

本施設の立地検討にあたっては、市内における人口分布の状況および交通利便性を基礎的な評価軸としました。

男鹿市内では、人口が比較的集積している地区として船越地区および船川地区が挙げられます。これらのエリアは、市内における居住者数が一定規模確保されていることから、市民の日常的な利用を支える拠点としての可能性を有しています。

また、交通面においては、幹線道路への接続状況や鉄道駅との近接性など、公共交通および自動車双方からのアクセス条件が比較的整っているエリアでもあります。特に船川地区は男鹿駅を有し、市外来訪者の玄関口としての機能を担っています。一方、船越地区は市内居住者の生活動線上に位置しており、日常利用の利便性が高い立地特性を有しています。

以上のように、人口集積および交通利便性という客観的観点から整理した結果、船越エリアおよび船川エリアを本構想における立地検討の対象エリアとして設定し、以下に比較検討を行います。

5-1 候補地の比較

候補地① 男鹿工業高校の敷地

住所 船越字内子

敷地面積 73,321㎡

区域区分 都市計画区域内／区域区分非設定（非線引き地域）

用途地域 国道から50mまで 準工業地域 指定容積率200%、指定建ぺい率60%
その他 第一種中高層住居地域 指定容積率200%、指定建ぺい率60%

防火地域 なし

防災関係 浸水深0.5m未満（男鹿市津波ハザードマップ）

前面道路 国道101号（都市計画道路・完成）

候補地② 船越こども園の隣地

住所 船越字内子

敷地面積 12,334㎡

区域区分 都市計画区域内／区域区分非設定（非線引き地域）

用途地域 第二種住居地域 指定容積率200%、指定建ぺい率60%

防火地域 なし

防災関係 浸水深0.5m～2.0m未満（男鹿市津波ハザードマップ）

前面道路 男鹿市道

候補地③ 男鹿駅周辺広場の市民駐車場

住所 船川港船川字新浜町1-11、1-13

敷地面積 2,487㎡

区域区分 都市計画区域内／区域区分非設定（非線引き地域）

用途地域 準工業地域 指定容積率200%、指定建ぺい率60%

防火地域 法22条指定地域

防災関係 浸水深5m～10m未満（男鹿市津波ハザードマップ）

前面道路 臨海道路埋立幹線

これら3候補地について、各敷地の立地条件や特性、計画規模やコンセプト等との整合性を比較しました。それぞれのエリアで、メリット、留意点の存在を確認することができます。

比較項目		船越エリア		船川エリア
		男鹿工業高校	船越こども園の隣地	男鹿駅周辺広場の市民駐車場
敷地規模		○十分な規模を有する ※既存の高校校舎活用の可能性	○十分な規模を有する	○十分な規模を有する ※2階建を想定
土地所有者		△県有地 土地取得に係るコスト・手続きを要する	△民有地 土地取得等に係るコスト・手続きを要する	○市有地
アクセス・利便性	市内から	○幹線道路沿い	○同左	○鉄道駅至近 ○市役所やオガーレに近接
	市外から	△駅から離れた立地	△同左	○駅至近
周辺環境・立地特性		○ファミリー世帯が集中するエリア ○比較的大規模な商業施設とも近接	○同左	○居住に加え、観光資源・自然資源との近接性がある
浸水リスク		○比較的低	○同左	△比較的高 ※避難施設に近接
駐車場		○当該敷地内での計画を想定	○同左	○近隣の駐車場活用も検討
既存施設からの近接性	図書館	既存の施設とは別エリア	同左	既存施設に近接
	子育て支援センター	既存施設に近接	同左	既存施設とは別エリア
まとめ		<ul style="list-style-type: none"> ・特にファミリー世帯が集中するエリアという視点で優位性がある。 ・土地取得のコスト・手続きが発生する点は留意が必要。 		<ul style="list-style-type: none"> ・観光客も取り込む視点で優位性がある。 ・浸水リスクへの対応は留意が必要。

5-2 立地方針

本施設の立地については、船越エリアおよび船川エリアを対象に比較検討を行いました。あわせて、船越エリア内においては、男鹿工業高校敷地と船越こども園隣地の2候補地について、それぞれの特性を整理しました。

船越エリアの特徴：（該当地：男鹿工業高校敷地・こども園隣地）

船越エリアは、市内でも居住者が集中している地域であり、こども園や大型商業施設が立地していることから、日常的な市民利用における利便性が高いエリアです。子育て世代を中心とした生活動線と重なりやすい点は、本施設の性格とも親和性が高いと整理できます。

一方で、鉄道駅から一定の距離があること、観光エリアとの直接的な連続性が弱いことから、市外からの来訪者にとってのアクセス性や視認性については、船川エリアと比較すると課題が残ります。

■ 男鹿工業高校敷地

男鹿工業高校敷地は大規模な敷地を有しており、本施設の計画建物に対して十分な面積を確保することが可能です。一方で、想定される建物規模に対して敷地が広いため、外構整備や維持管理の範囲が大きくなり、初期整備費やランニングコストが増加する可能性があります。

また、本敷地は県有地であるため、土地取得に係る費用や手続きが必要となります。加えて、既存の高校校舎が立地していることから、既存建物を活用する計画も選択肢として考えられます。用途変更や増改築に伴う法的整理が必要となるものの、完全な新築と比較して、環境負荷やコスト面で一定のメリットが生じる可能性もあります。

■ 船越こども園隣地

船越こども園隣地についても、計画建物に対して十分な敷地規模を有していますが、男鹿工業高校敷地と同様に、敷地規模が大きいことによる外構整備や維持管理コストの増加が課題となる可能性があります。

本敷地は民有地であるため、土地取得に係る費用や手続きが必要となります。一方で、隣接するこども園との連携により、日常的な活動の場として本施設を活用するなど、子育て支援機能との相乗効果を生み出す可能性があります。

船川エリアの特徴：該当地：男鹿駅周辺広場（市民駐車場）

船川エリアは、船越エリアに次いで居住者が集中している地域であり、市役所に近接していることから、市民利用における利便性の高いエリアです。

また、男鹿駅はオガーレ、GAO、鶴ノ崎海岸、なまはげ館、入道崎など、市内主要観光スポットへの交通結節点となっており、市外からの来訪者にとっても分かりやすく、立ち寄りやすい立地です。この点において、他の候補地と比較して、市外利用者を呼び込むポテンシャルが高いエリアといえます。

■ 男鹿駅周辺広場（市民駐車場）

男鹿駅周辺広場の市民駐車場敷地は、他の候補地と比べると敷地規模は小さいものの、本施設の想定規模を踏まえると、2階建てとすることで十分に計画可能な敷地規模であると考えられます。

本敷地は市有地であるため、県有地や民有地で必要となる土地取得に係る費用や手続きを要しない点は大きな利点です。また、道の駅オガーレに隣接していることから、両施設の相互利用による来館者の利便性向も期待できます。なお、駐車場の需要台数や運用方法については、今後の検討が必要です。

第6章 施設規模・概算事業費の考え方

6-1 規模・施設構成の考え方

本施設の規模および施設構成の検討にあたっては、既存の図書館および子育て支援センターの機能・規模を基礎としつつ、施設の現状、関係者へのヒアリング結果、市民アンケートの内容などを踏まえながら、各機能について拡張または縮減の方向性を整理します。

具体的には、図書館機能における開架書庫、一般閲覧室および児童閲覧室、ならびに子育て支援機能における屋内遊び場については、現在の利用実態や市民ニーズを踏まえると、拡張が望まれる用途として整理されます。また、アンケート結果ではカフェ機能の設置を望む声が多く見られ、外部からの来訪者の利用を想定した場合においても、滞在性を高める機能として有効であると考えられます。あわせて、カフェ機能の運営に指定管理者制度等を活用することで、施設全体の日常的な管理と連動させるなど、維持管理の合理化につながる可能性も想定されます。

さらに、市外からの来訪者の利用や、男鹿市の観光資源・暮らしに関する情報発信といった視点から、関連機能を付加することについても、今後の検討事項と位置づけます。

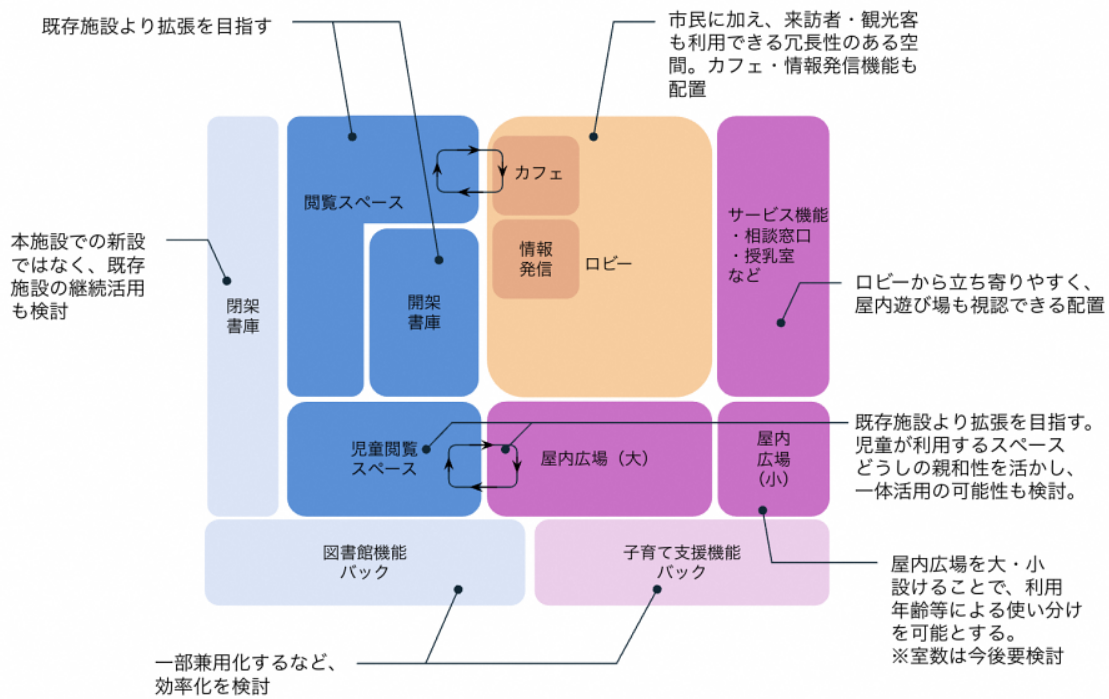
一方で、バックヤード諸室については、配置や使い方の見直しによる効率化を図ること、全体規模の抑制につながることで、コスト面からも重要です。雨漏り対策などに十分配慮した上で、図書館機能における閉架書庫などについては、既存建物の機能を継続的に活用することにより、新設部分の規模を圧縮できる可能性も考えられます。また、駐車場については、男鹿駅周辺広場の市民駐車場敷地のように、隣接地域に十分な駐車スペースが確保されている場合には、新設をバリアフリー対応や搬出入動線など必要最小限にとどめることで、整備コストを抑える余地があると整理できます。その他、複合交流施設として、核となる施設を整備し、不足する機能を補うため、空き店舗、空き家を活用することも検討の余地があります。

既存施設の規模としては、図書館機能および子育て支援センター機能を合計すると、約1,600㎡（約480坪）程度となります。この規模を一つの目安としながら、付加する機能、縮減可能な機能、既存施設の継続活用の可能性、ならびに事業予算との整合を踏まえ、本施設として適切な規模を設定していく必要があります。

なお、建設工事費単価を仮に300万円／坪とした場合、480坪に対する建設工事費は約14～15億円程度となります。これは本施設の工事費単価を確定的に示すものではなく、あくまで規模感を把握するための仮定値です。

以上を踏まえ、本施設の施設構成と基本計画以降の検討方針は以下のように整理することができます。

▼ 複合交流施設 機能構成ダイアグラム



▼ 複合交流施設のある、まちなみイメージ



(上記イラストはあくまでイメージであり、建築物の構成や、建設地等に影響を及ぼすものではありません)

6-2 事業費の考え方

本施設の整備にあたって想定される事業費の主な項目としては、概ね以下の内容が挙げられます。

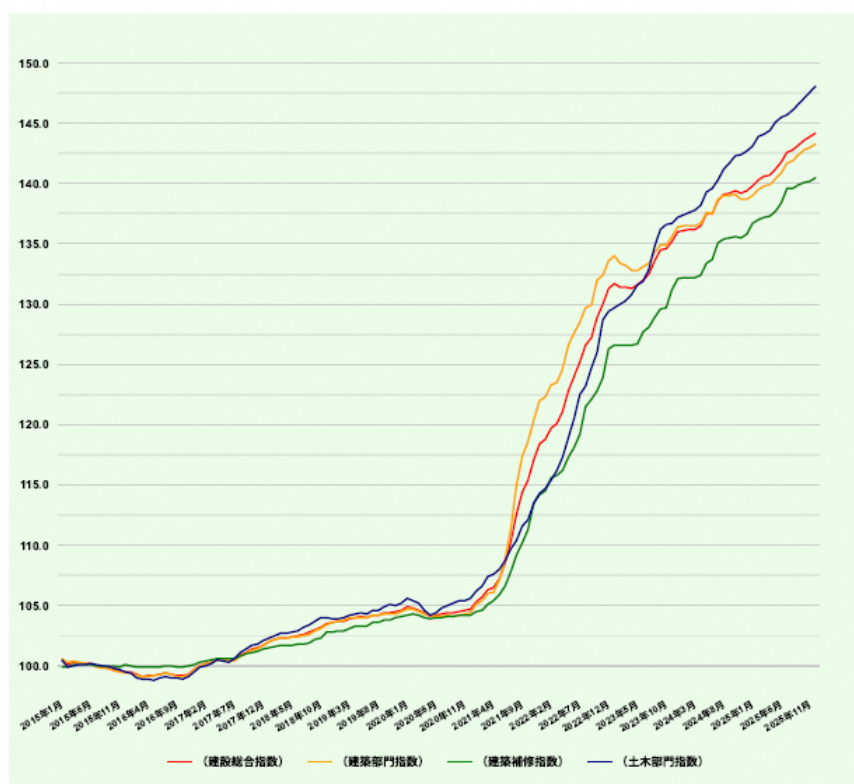
- ・ 基本構想・基本計画・各種調査費（測量等）
- ・ 基本設計・実施設計費
- ・ 建設工事費（建築・設備）・外構工事費
- ・ 工事用仮設費
- ・ 工事監理費
- ・ 内装工事費および什器・備品類に係る費用
- ・ 事務費
- ・ 維持管理・更新関連費

このほか、候補地や整備手法によっては、用地取得費、既存施設の撤去費、土地造成や整備に係る費用などが別途必要となる可能性があります。

なお、建設工事費を取り巻く状況として、一般社団法人建設物価調査会が公表している建設資材物価指数（全国・全品目・2015年～2025年）を見ると、過去10年程度で指数が約1.5倍に上昇しており、建設工事費の高騰が続いている状況が確認されます。

こうした背景を踏まえると、本施設の整備にあたっては、施設規模の適正化や空間構成の合理化を図ることが重要となります。限られた事業費の中で、本施設が果たすべき役割を確保していくためにも、事業費を抑制するための工夫や選択肢について、今後の検討の中で丁寧に整理していく必要があります。

建設物価 建設資材物価指数 品目別 総合（全国）



出典：一般社団法人建設物価調査会

第7章 整備スキーム・運営方式

本章では、現時点で整備手法や運営方式を決定するものではなく、男鹿市における複合交流施設の公共性や規模感を踏まえ、想定し得る選択肢と今後検討すべき論点を整理することを目的とします。

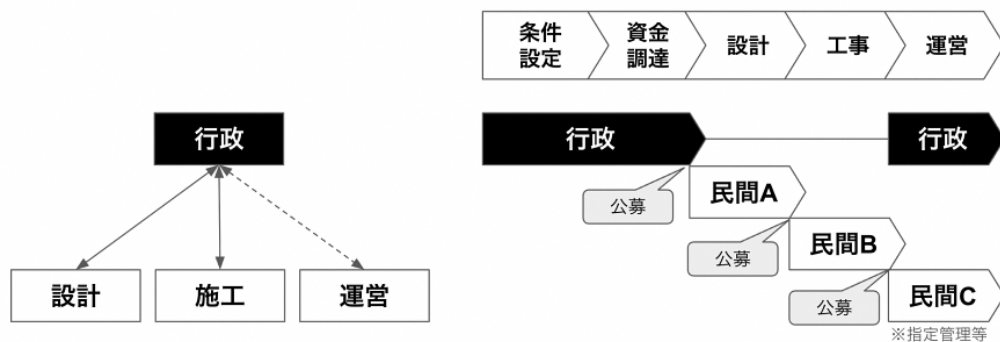
7-1 想定しうる事業手法

複合交流施設の整備については、従来型である公共が施設を建設し、維持管理及び運営を行う方式のほか、設計から建設、維持管理及び運営までの業務を一連で民間の資金やノウハウを活用する方式（PFI方式等）もあります。以下にて、それぞれの事業手法について、整理及び比較を行います。

■ 従来型方式

市の財源を用い、設計・建設について業務ごとに民間事業者へ委託・発注し、施設完成後は市が直接運営する方式です。

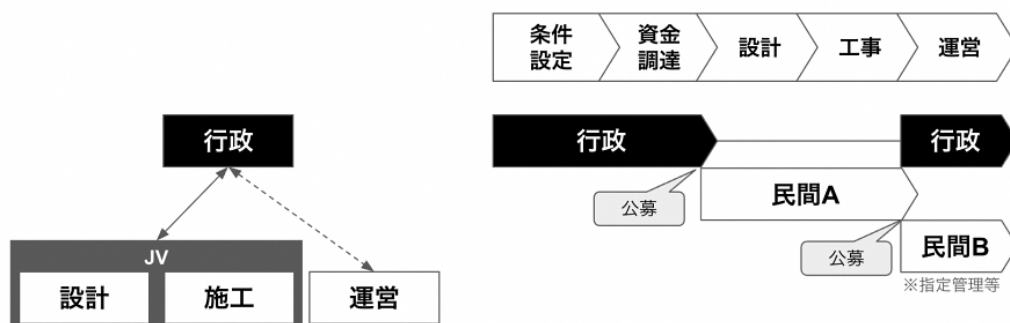
なお、運営は、指定管理を用いて、民間事業者へ委託する方法も考えられます。



■ DB方式

設計（Design）と施工（Build）を一括して単一の事業者へ発注する契約形態で、設計と施工を一部並走させることが出来るため、スケジュール短縮に繋がることや、設計段階から施工ノウハウを持ち込むことでコスト削減に繋がる事が期待されます。

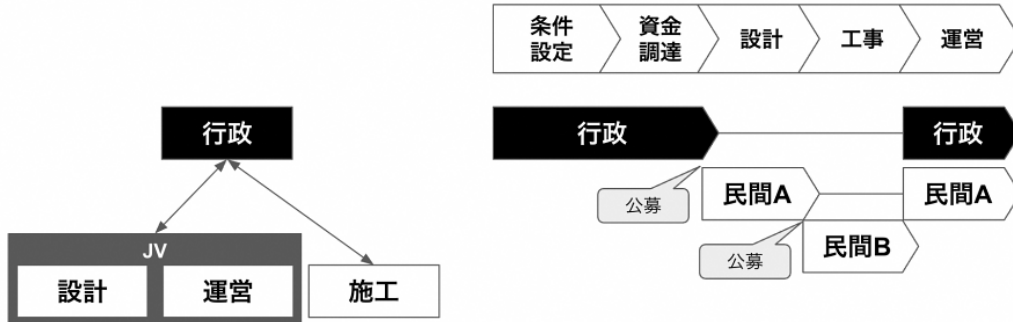
運営について、DB方式と指定管理を組み合わせることもできます。



■ DO方式

設計（Design）と運営（Operate）を一括して民間事業者に委ねる契約形態で、施工（Build）は市が別途発注します。

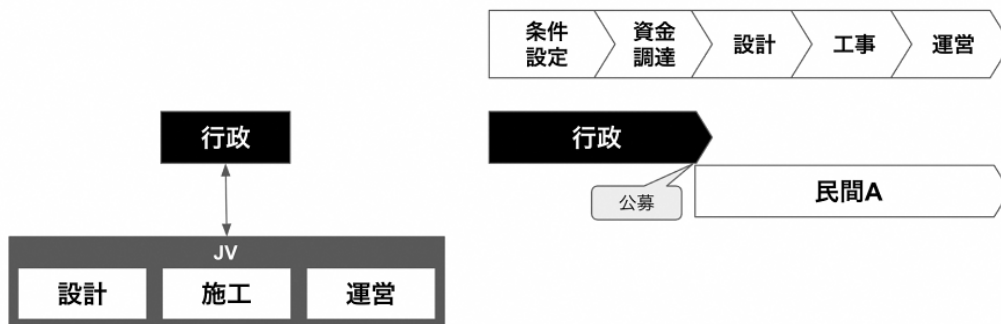
運営主体を先に定めることで、完成後の使われ方やサービス内容を見据えた設計が可能となり、運営視点を設計段階から反映できる点が特徴です。



■ DBO方式

設計（Design）、施工（Build）、運営（Operate）を一括して民間事業者に発注する契約形態で、施設整備から供用後の運営までを一体的に担わせる方式です。

設計・施工段階から将来の運営を見据えた計画が可能となり、ライフサイクル全体での効率化やコスト抑制が期待されます。

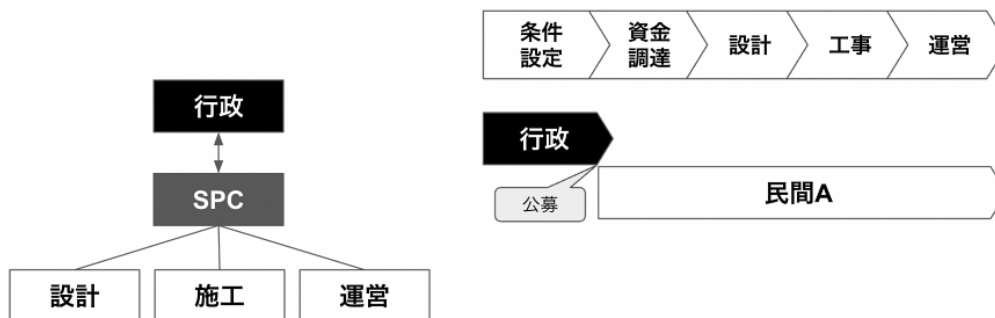


■ PFI方式

PFI法（民間資金等の活用による公共施設等の整備等の促進に関する法律）に基づいて、民間事業者が資金を調達し、設計・施工、維持管理等を一体的に行う方式です。

原則として施設の所有は民間事業者に帰属し、公共はサービス提供に対して対価を支払う形となるため、初期投資の平準化やライフサイクル全体での効率化が期待されます。

一方で、契約期間が長期に及ぶことや、事業規模・収益性が一定水準以上でないとなれば成立しにくい点から、公共性の高い中小規模施設では慎重な検討が必要となります。



■ 各手法の比較・整理

男鹿市の複合交流施設は、想定事業規模が概ね10～20億円程度と想定されており、図書館および子育て支援施設（屋内こども広場）を中核とする、公共性の高い施設であることが前提となります。この規模感および公共性を踏まえると、PFI方式のように民間主導で資金調達・運営を一体化する手法は、現時点では必ずしも最適とは言い切れません。

一方で、設計・運営を一括して発注するDO方式や、設計・施工に加えて運営までを一体的に検討するDBO方式など、従来方式に比べて民間の知見を取り入れやすい手法も選択肢として考えられます。本施設は完成後の「使われ方」や「運営の工夫」によって価値が大きく左右される施設であるため、将来の運営を見据えた整備手法の検討は重要な視点となります。

そのため、次段階である基本計画においては、単に施設規模や配置、概算事業費を整理するだけでなく、官民連携の可能性を検証するための調査・民間事業者へのヒアリングを併せて実施することが重要と考えられます。民間事業者の参画意向や、担える役割、収益性やリスクの捉え方を早期に把握することで、実現性の高い事業スキームの検討につなげることが可能となります。

また、施設全体は公共直営を基本としつつも、カフェ機能を指定管理とすることや、屋内こども広場について外部事業者へ運営を委ねることなど、機能ごとに運営主体を柔軟に組み合わせる可能性も考えられます。こうした部分的な民間活用は、公共性を担保しながら、施設の魅力や持続性を高める手段の1つとして位置づけられます。

事業手法の比較整理図：

手法	資金調達主体	目安事業規模	公共性	事業進捗に応じた融通性・発展性
従来型	公共（市）	小規模～中規模	公共色が強い	各段階で見直し可能だが、全体最適は図りづらい。
DB	公共（市）	小規模～中規模	公共色が強い	設計・施工段階の工夫は可能。運用後の発展性は運営方式に依存。
DO	公共（市）	小規模～中規模	公共色が強い	運営改善や役割変更が比較的柔軟。段階的発展との相性が良い。
DBO	公共（市）	中規模	公共と民間の間	初期の全体最適化に優れるが、契約期間中の変更は融通が効きづらい。
PFI	民間	大規模	民間色が強い	長期契約前提となり柔軟性は低い。初期段階での計画精度が重要。

7-2 持続可能な運営のための課題

本施設は、図書館および子育て支援機能（屋内こども広場）を中核とする公共性の高い複合交流施設であり、整備後も長期にわたって市民に利用され続けることが求められます。そのため、建物や設備の整備だけでなく、運営をいかに持続可能な形で成立させるかも重要なテーマとなります。

アンケートおよびワークショップで得られた市民の声も踏まえると、以下のような運営上の課題と検討事項が整理できます。

■ 日常利用を支える運営体制の確保

アンケートやワークショップでは、「特別な用事がなくても立ち寄れる」「長時間いてもよい」「何もしなくても過ごせる」といった、日常的な居場所としての使われ方が強く求められていました。

こうした利用を支えるためには、イベントやプログラム中心の運営だけでなく、日常的に人が常駐して安心感を生む体制や、子どもや高齢者に対するさりげない見守り、初めて訪れた人にも使い方が伝わる対応といった、日常を支える運営・工夫が不可欠です。

一方で、これらは人手や運営コストに直結するため、どこまでを市の直営で担い、どこを外部に委ねるのかについては、今後、具体的な運営体制と合わせて慎重に検討する必要があります。

■ 多様な利用者の共存を成立させる運営の工夫

ワークショップでは、子ども、子育て世代、学生、高齢者、市外からの来訪者など、多様な利用者が同じ空間に居合わせることを前提とした意見が多く出されました。

その一方で、この共存は空間構成だけで自動的に成立するものではなく、音や行為に対する許容の考え方、空間の使われ方に関する暗黙の理解、利用者同士の関係性への配慮といった、運営による調整があって初めて成り立つものであることも示されています。

施設の空間構成のみで利用を制御するのではなく、運営の中で状況に応じた関わり方ができる余地を持つこと、そして利用者自身が施設の雰囲気と共有し、育てていく関係性を築けることが重要な視点となります。

■ 交通・アクセスを含めた運営上の配慮

子どもや高齢者など、自ら移動手段を持たない人でも利用しやすいよう、交通やアクセス面への配慮を求める声も挙げられました。

これは立地条件の問題にとどまらず、送迎や循環バスとの連携、周辺施設との動線の考え方、運営時間帯や利用ルールの工夫など、運営によって補完できる要素も含んでいます。施設単体で完結するのではなく、まち全体の中でどのように使われるかを意識した運営のあり方が求められています。

■ 今後のプロセスで検討・決定すべき事項の整理

以上を踏まえ、本施設の運営に関しては、次段階である基本計画において、以下の点を具体的に検討・整理していく必要があることが明らかになりました。

- 直営・指定管理・外部委託の役割分担
- 必要となる人員体制と運営コストの見通し
- 利用者の共存を支える運営ルールの考え方
- 交通・アクセスを含めた運営上の補完策

第8章 今後の進め方（ロードマップ）

8-1 想定される全体スケジュール

本構想は、男鹿市における複合交流施設の整備に向けた出発点として、施設の役割やコンセプト、市民ニーズ、検討すべき論点を整理することを目的として取りまとめてきました。本章では、本構想を踏まえ、今後想定される検討・整備の全体的な流れを段階的に整理します。

■ 基本計画フェーズ

基本構想で整理した方向性をもとに、施設の具体像をより明確にしていく段階です。施設の立地決定を含め、事業全体の枠組みを具体化します。あわせて、想定される整備スキームや運営方式の整理を行い、構造、規模、特殊要件などの前提条件を整理します。これらを踏まえ、延床面積と想定単価による超概算レベルの事業費算定を行い、市としての大まかな予算感を把握します。

■ 基本設計フェーズ

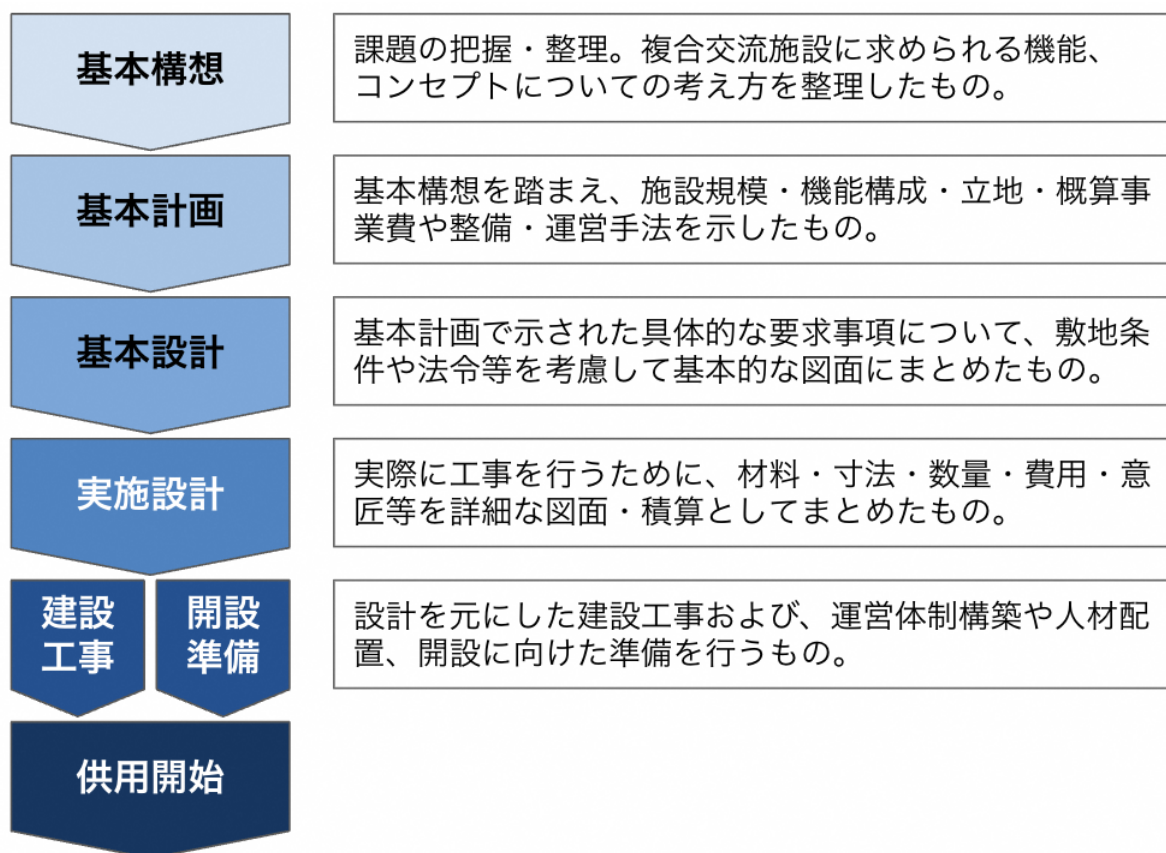
基本設計では、建築・設備計画を具体化し、事業費の精度を高めていきます。主要構造、設備内容、必要諸室の構成などを図面化し、積算に基づく概算事業費の算定を行います。この段階では、コストと機能のバランスを確認・予算調整のための検討を行い、段階的に事業費の調整を行うことを想定します。利用のしやすさや安全性、運営との整合性も図面レベルで検討していきます。

■ 実施設計フェーズ

基本設計の内容をもとに、実際の建設工事に必要となる詳細な設計を行う段階です。構造・設備・仕上げ等の仕様を確定させ、工事費を確定させるための精査や施工方法の検討を行います。このフェーズで設計内容が確定することで、建設工事に向けた具体的な準備が整います。

■ 建設工事・開設準備フェーズ

実施設計完了後、建設工事を実施するとともに、施設開設に向けた準備を進める段階です。工事期間中から、運営体制の構築、人員配置、運営ルールの整理、試行的な取り組みや広報活動などを並行して進めていくことが想定されます。施設は、開設後の運営や使われ方を通じて価値が育まれていくことを前提に、オペレーションの設計・検討を行います。



8-2 次フェーズへの引き継ぎ論点まとめ

本基本構想では、男鹿市における複合交流施設の必要性、市民ニーズ、コンセプトおよび基本的な方向性を整理してきました。一方で、基本構想はあくまで検討の出発点であり、次フェーズとなる基本計画において、より具体的かつ実務的な検討を進めていく必要があります。

以下に、基本計画以降で重点的に検討・判断すべき主な論点を整理します。

■ 施設規模・機能構成の具体化

本構想では、図書館機能と屋内こども広場を中核としつつ、交流・滞在・付帯機能を重ねる方向性を示しましたが、実際の床面積配分や機能の優先順位、段階整備の可能性については、予算条件や運営体制を踏まえた精査が必要となります。

■ 立地の決定に向けた考え方整理

本構想では、船越エリアおよび船川エリアを候補として整理してきましたが、基本計画においては、交通アクセス、駐車場の確保・運用、周辺施設との連携、用地条件、将来的な拡張性や運営のしやすさなどを総合的に評価し、市として立地を決定することが求められます。基本計画では、住民意見を含めた多様な視点を踏まえつつも、評価軸に基づく客観的な整理を行い、その結果をもとに市が最終判断を行うプロセスとすることが重要です。

■ 事業費および財源確保の考え方整理

本構想では概算的な事業費の目安を示すに留めていますが、基本計画では、規模・機能・立地を踏まえたより具体的な事業費の概算を示すこととなります。また、国・県補助制度の活用可能性、地方債の検討など、現実的な財源の組み立てについて整理を進めていく必要があります。

■ 整備スキームおよび運営方式の選定

直営、指定管理、DB・DO・DBO・PFI等の各手法について整理しましたが、施設規模や公共性、運営裁量の考え方を踏まえ、どの範囲を行政が担い、どの範囲を民間と協働するかを民間事業者へのヒアリング等も行いながら、具体化していく必要があります。

■ 運営体制と人の関わり方の具体化

施設の魅力は建物だけでなく、日常的な運営や人の関わりによって形成されます。必要人員、役割分担、専門性の確保、交通手段を持たない人への配慮など、運営を前提とした計画検討が求められます。

■ 市民・関係者との継続的な対話の設計

本構想において実施したアンケートやワークショップで得られた視点を活かしながら、基本計画以降においても、市民や関係団体との意見交換を継続し、構想と計画の乖離を防ぐ必要があります。

本構想で整理したこれらの論点を、次フェーズである基本計画へ確実に引き継ぎ、男鹿市らしい複合交流施設の実現に向けた検討を段階的に深めていくことが重要となります。

補足資料

補足① 市民アンケート調査票

あなたご自身のことについて、お伺いします。

1, あなたの性別を選んでください。

男性 女性 回答しない

2, あなたの年齢を選んでください。

10代 20代 30代 40代 50代 60代 70代以上

3, あなたがお住まいの地域を選んでください。

船川 椿 戸賀 北浦 男鹿中 五里合 脇本 船越 若美

4, あなたの家族構成を選んでください。（複数選択可）

ひとり暮らし 夫婦のみ 子育て中（未就学児あり）
 子育て中（小中高生あり） 親と同居 その他（ ）

5, あなたの職業を1つを選んでください。

経営者・役員 学生 会社員 公務員
 自営業 専業主婦・主夫 無職
 その他（ ）

既存の公共施設について、お伺いします。

6, 現在、男鹿市立図書館をどのくらい利用していますか？

- | | |
|--|---|
| <input type="checkbox"/> よく利用している（週1回以上） | <input type="checkbox"/> たまに利用している（月1回程度） |
| <input type="checkbox"/> ほとんど利用しない | <input type="checkbox"/> 利用したことがない |

7, 男鹿市立図書館を利用する目的を教えてください（複数回答可）

- | | | |
|------------------------------------|------------------------------------|----------------------------------|
| <input type="checkbox"/> 読書・貸出 | <input type="checkbox"/> 学習・調べもの | <input type="checkbox"/> 子どもと過ごす |
| <input type="checkbox"/> イベント・講座参加 | <input type="checkbox"/> 静かな場所で過ごす | |
| <input type="checkbox"/> その他（ | | ） |

8, 男鹿市立図書館の良いところを教えてください（自由記述）

--

9, 図書館について、改善してほしい点があれば教えてください（自由記述）

--

10, 子育て支援センターを利用したことがありますか？

- | | |
|--|---|
| <input type="checkbox"/> よく利用している（週1回以上） | <input type="checkbox"/> たまに利用している（月1回程度） |
| <input type="checkbox"/> ほとんど利用しない | <input type="checkbox"/> 利用したことがない |

11, 子育て支援センターを利用する目的を教えてください（複数回答可）

- | | |
|--|--------------------------------------|
| <input type="checkbox"/> 子どもを遊ばせるため | <input type="checkbox"/> 他の親子と交流するため |
| <input type="checkbox"/> 子育て相談をするため | <input type="checkbox"/> イベント・講座への参加 |
| <input type="checkbox"/> 一時預かりや支援サービスの利用 | |
| <input type="checkbox"/> その他（ | ） |

1 2, 子育て支援センターの良いところを教えてください (自由記述)

1 3, 子育て支援センターについて、改善してほしい点があれば教えてください (自由記述)

1 4, 男鹿市以外の市町村にある図書館や子育て支援施設、屋内の子どもの遊び場などを利用することはありますか？

- よく利用している (週1回以上) たまに利用している (月1回程度)

ほとんど利用しない 利用したことがない

1 5, 他の市町村の施設名と利用する理由を教えてください。 (複数回答可)

施設名[_____]

- 施設が新しくきれいだから 子どもが楽しめる設備や遊具があるから

カフェ・飲食スペースがあるから 利用時間やイベントの種類が多いから

天候が悪い日も遊ばせられるから 借りたい本が男鹿市の図書館に無いから

男鹿市内には同じような施設が無いから

その他 (_____)

新施設への期待やニーズについて、お伺いします。

16, 新しい複合交流施設ができたなら、どんな用途で利用したいですか？
(複数回答可)

<input type="checkbox"/> 読書・学習	<input type="checkbox"/> 子どもと遊ぶ(屋内遊び場の利用)
<input type="checkbox"/> カフェでくつろぐ	<input type="checkbox"/> イベントや講座に参加する
<input type="checkbox"/> 交流スペースで人と会う	<input type="checkbox"/> ワークスペースとして使う
<input type="checkbox"/> 子育て相談や情報交換をする	<input type="checkbox"/> 一時預かり・親子休憩・授乳スペース
<input type="checkbox"/> 親子で参加できるプログラム(読み聞かせ・工作教室など)	
<input type="checkbox"/> その他()	

17, あなたにとって「居心地のよい公共施設」とはどんな場所ですか？
(自由記述)

18, 以下の機能に対して、どのくらい関心がありますか？○を付けてください。
(5段階評価：5：とても関心がある～1:まったく関心がない)

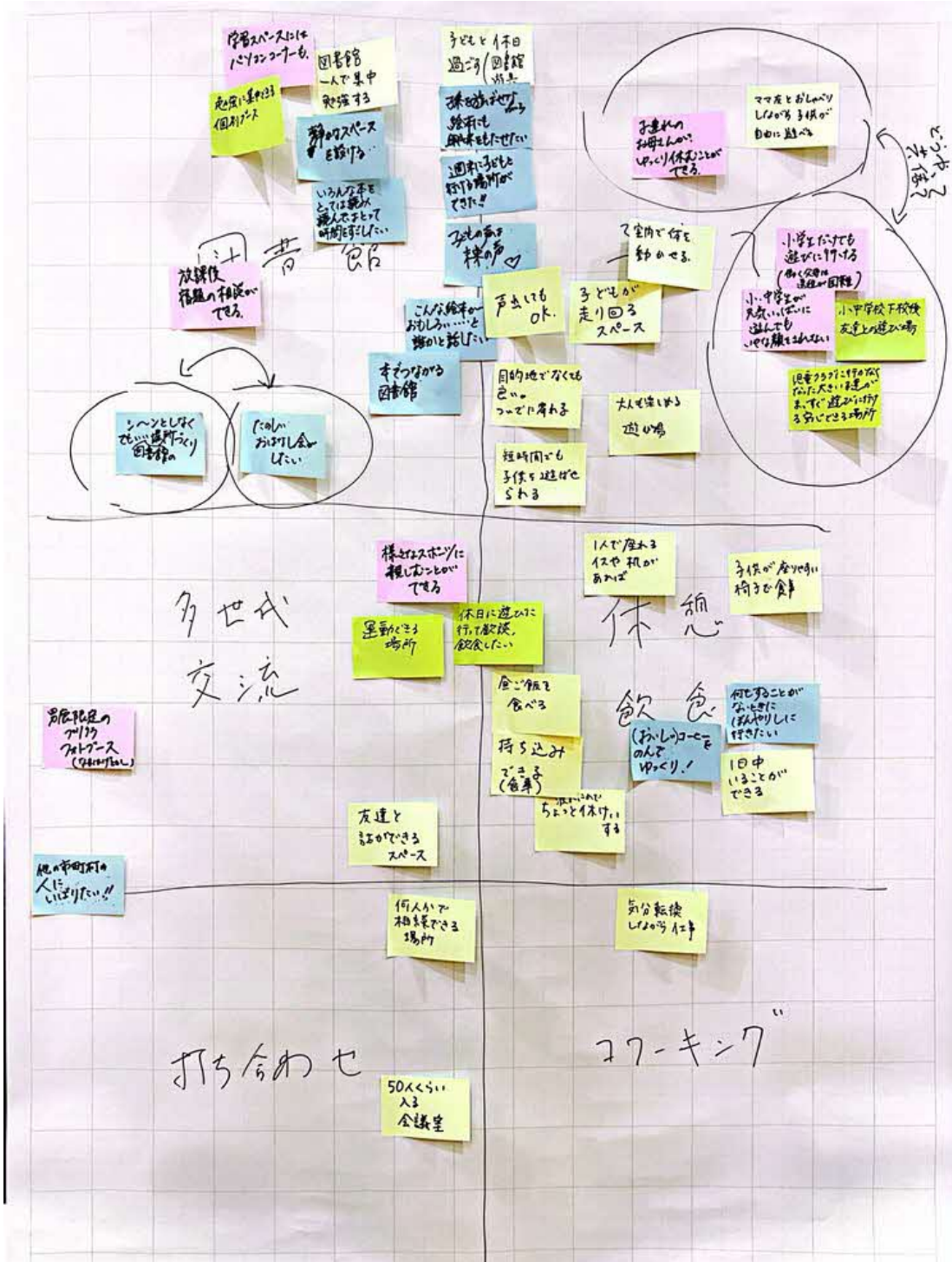
図書館(読書・貸出・閲覧)	1	2	3	4	5
屋内プレイパーク(子どもの遊び場)	1	2	3	4	5
カフェ・飲食スペース	1	2	3	4	5
イベント・講座・ワークショップ	1	2	3	4	5
多世代交流スペース	1	2	3	4	5
自習・ワークスペース	1	2	3	4	5
子育て相談・一時預かり	1	2	3	4	5

19, 複合交流施設にあったら嬉しい「機能」や「設備」を記入してください。
(例：授乳室、キッチンスタジオ、屋外デッキ、楽器練習室など。自由記述)

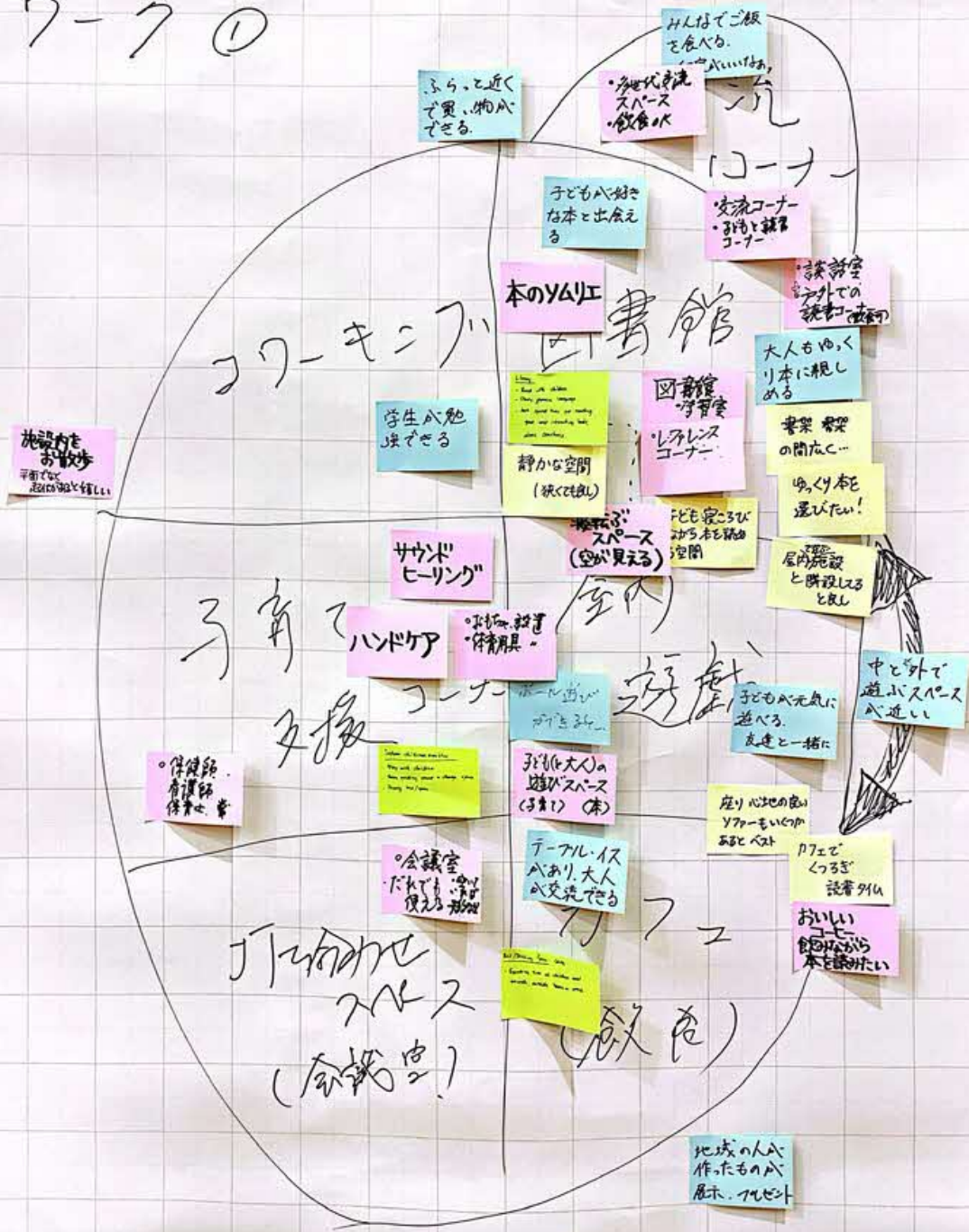
補足② 市民ワークショップ ワークシート

ワーク① 「立場の違いから見える過ごし方と気づき」

参加者一人ひとりの実感を起点にしながら、子ども連れ、高齢者、初めて訪れる人など、自分とは異なる立場の視点も重ね合わせて考えることで、複合交流施設における多様な過ごし方や配慮点を洗い出しました。



7-7①



ワーク② 「居心地の良さの共存を考える」

同じ空間にしながら、それぞれが自分なりの過ごし方を選べる施設とはどのようなものかを、参加者の感覚から言語化しました。



7-7②

館内 ラジオ FM

廃校になった学校のビル

ギャラリー

年齢ごとの子ども以下のお子様専用 (屋内)

ストリートピアノ

レンタル空間 作業展示 展覧・演奏

あそび山を飛ぶところ = 昇龍を飛ぶところ

館一の最上の4-F. 空間がどうなる。

地域を保全するものとして子どもが創作できる

空間がわかっている

「うるさい」と観望を促すために

貝がら、シーグラス 海外のゴミ 流木

階がわかっている。

鮮やかなカラー 場所がわかるように

集中できる 区切られたスペース

色んなゾーン 色んな世代の人

カーペットの色の違い

照明 音楽 BGMのゾーニング

リユース 学用品、制服

情報交換と不用品交換会

気軽に入れる

掲示板

笑顔 あたたかい 朝の顔で迎える

建物の入り口、エレベーター、階段、トイレ、お風呂、お風呂、お風呂、お風呂

時間ごとの区切り?

2700北

緑がたんたん! いまどき!

転入した人たちの交流 出会い

Film & Videoの本と壁のコーナーが水の壁みたい!

中間とランチが出来る

みんなの生活圏に寄り添っている 場所がわかる

コンビニに乗り機能

作業が集まる場所。中心 長居のり

喫茶 軽食 コーナー

子ども遊戯場 遊具がある

絵本の読み聞かせコーナー (親子)

年齢があるものとつり合わせる

他の施設と連携情報共有 連携

くらしが楽しく 絵本の読み聞かせ

子ども、親世代が一緒にできる。展示スペース。絵本の読み聞かせコーナー。お風呂、お風呂、お風呂、お風呂